



2019 年度

アンコール遺跡整備公団

インターンシップ報告書

公立小松大学/金沢大学

アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

2020 年 1 月





写真1. 初出勤の日にホテルの前で（左から：池田絢香，高畑悠歌，宮島柚果，鳥生真衣，佐藤優，奥村颯太，酒井朋花，2019年8月19日）。

写真2. アプサラ公園水管理部門での業務初日の始業式と担当職員との顔合わせ。

写真3. その日の業務についての担当職員との業務後のディスカッション。

写真4. 担当職員とのディスカッションをふまえての業務報告書のとりまとめ。





写真 1. 西メボンの現場で担当職員の説明をうける.

写真 2. ニャック・ポアン寺院の見学.

写真 3. シム・ブントウンさんの案内で古代集落ロヴィア村を訪問する.

写真 4. クメールハビタットセンターでの野外講座.

写真 5. タ・ソム水門でのシェムリアプ川の流況調査.

写真 6. クメールハビタットセンターでその日の報告書を現場でとりまとめる.

写真 7. アンコール・トムの野生のサルとの記念写真.



写真1. ルンタエク・エコビレッジの子どもたちと。
 写真2. 新しい村づくり事業についての説明を責任者のウン・トンエアンさんからうける。
 写真3. トラクターでエコビレッジの中を移動する。
 写真4. エコビレッジでの記念植樹。
 写真5. アプサラ公団水管理部門副部長たちによる最終面談試験。
 写真6. インターンシップ修了証の授与式。
 写真7. お世話になった職員のみなさんと。



写真1. 行きつけのフォーレストランでの昼食。
 写真2. アプサラ公団ハン・プウ事務局長との夕食。
 写真3. トンレサップ湖畔のハス畑にて休日に。
 写真4. 休日に訪れたバンテアイ・スレイ寺院。
 写真5. フランス植民地時代の雰囲気が残るシムリアプの街の裏通り。
 写真6. タ・プローム寺院の巨木の下で。
 写真7. 2週間にわたってお世話になった運転手のペンさんと帰国前にシムリアプ空港で。

2019年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

目 次

1. ごあいさつ	山本 博	・・・	1
2. 2019年度インターンシップの概要と成果, 今後の課題	塚脇真二, ハン・プウ・・・		3
3. 公立小松大学でのアンコール世界遺産インターンシップ	木村 誠	・・・	7
4. インターンシップ参加学生の報告			
1) インターンシップを終えて	池田絢香	・・・	11
2) アンコールインターンシップを通じて	高畑悠歌	・・・	16
3) アンコールインターンシップで得たもの	奥村颯太	・・・	21
4) インターンシップに参加して	宮島柚果	・・・	25
5) インターンシップを終えて	鳥生真衣	・・・	29
6) アンコールインターンシップを終えて	佐藤 優	・・・	33
5. チューターの報告			
1) 2度目のカンボジア	酒井朋花	・・・	39
6. 埼玉大学の海外フィールド教員研修報告			
1) 埼玉大学の海外フィールド教員研修	荒木祐二	・・・	43
2) 海外フィールド教員研修に参加して	鈴木宏子	・・・	46
7. 資 料 : 2019年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要		・・・	51
8. 資 料 : インターンシップでの業務地とおもな訪問地		・・・	54

図版1：インターンシップの参加者と始業式，室内業務

図版2：アンコール世界遺産公園でのさまざまな現場業務

図版3：ルンタエク・エコビレッジの見学とインターンシップの修了式

図版4：インターンシップでの休日や日々の暮らし

1. ごあいさつ

公立小松大学・学長 山本 博

仲秋の候、益々ご清適のことお慶び申し上げます。

さて、昨 2018 年度につづき、「アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書」にあいさつ文を寄せることができますことをうれしく存じます。

まず、報告書の作成にご尽力いただきましたインターンシップ実施委員会と寄稿者各位に御礼申し上げます。皆さまのお蔭をもちまして、このように真に充実した報告書が届けられる運びとなりました。

また、塚脇真二 金沢大学教授/公立小松大学特任教授、木村誠 公立小松大学准教授、金沢大学 3 年酒井朋花さんに感謝申し上げます。本インターンシップは、両先生と酒井チューターの周到な準備、適切な引率、現地でのきめ細やかな調整によって、無事、有意義に、成功裡に実現されました。

つぎに、ハン・プウ アンコール遺跡整備公団事務局長、別所健一 在カンボジア日本国大使館公使、實取直樹 在シエムリアップ日本国領事事務所所長、ウン・トンエアン エコビレッジプロジェクト現場責任者に深甚の謝意を表します。各位のご高配ご支援なしには、学生たちがアンコールという屈指の世界遺産で存分に好奇心をふくらませ、徹底して課題を追究し、通常では得がたい貴重な体験を積むことは叶いませんでした。

公立小松大学と金沢大学の関係者および公立小松大学基金にご篤志をお寄せいただきました方々にも御礼申し上げます。本事業の達成は、皆さまのご理解とご支援のお蔭です。本インターンシップが、昨年度「日カンボジア友好 65 周年事業」に認定されましたことは、なお記憶に新しいところです。今年度も外務省の「日メコン交流年 2019 事業」の一つとして認定されましたことは欣快にたえません。インターンシップが開始された 2010 年度以来の継続と内容が評価された賜物と考えられ、塚脇先生はじめこれまで貢献されたすべての方々に敬意と謝意を表する次第です。

そして、公立小松大学と金沢大学から参加された 6 名の学生の皆さん、2 週間に亘るインターンシップごくろうさまでした。皆さんが見聞、経験されたものごとや築かれた人的ネットワークは、皆さんの財産になるにちがいありません。たとえば、私が、ホンジュラス・コパン市の世界遺産を訪ねた折は、訪問者の名が記された樹は遺跡全体で 2 本しかなく、いずれも日本の皇族でした。ですから、アンコールのエコビレッジで植えた樹に皆さんの名前が記されたのは、たぶんととてもすごいことで、皆さんは皇族並みの待遇をうけたともいえます。途中つらいこともあったかもしれませんが、銘々がタスクを全うされ、全体としても、10 回目の節目を上首尾に飾っていただいたことは、本事業が今後、後輩たちにバトンタッチされて行くうえでも大きな貢献と評価されると思います。

公立小松大学中央キャンパスには美術品が多数陳列されており、3 階廊下には小松市出身

のアマチュア画伯 岸甫（はじむ）氏による絵画「遺跡の誓い」が架けられています。アンコール・トム バイヨン寺院が描かれた 50 号の大作です。アンコールインターンシップを経験された皆さんには、是非この絵の前に立ってほしい。すると、アンコールでの日々やそこで培ったことが甦るでしょうし、もし、そのとき、アンコールに参加しなかった同級生や後輩がいっしょなら、それがどういうところだったかを話してあげてほしいと思います。

最後に、本インターンシップが、公立小松大学、金沢大学の学生たちの貴重な学びの機会として、末永く継続されますよう願いますとともに、関係各位には、ひきつづき温かなご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます、あいさつとさせていただきます。

2. 2019年度インターンシップの概要と成果、今後の課題

金沢大学・教授／公立小松大学・特任教授 塚脇真二
アンコール遺跡整備公団・事務局長 ハン・プゥ

「海外での真の業務を学生たちに経験させたい」という意図から2010年度に金沢大学ではじまったカンボジアの国立アンコール遺跡整備公団（略称：アプサラ公団）での海外インターンシッププログラムは、昨年度に実施母体を公立小松大学へ移しつつも、今年度で10回目を数えた。このプログラムを10年間にわたってこころよく受け入れるとともにかわりない支援をいただいたアプサラ公団に感謝の意をまず表したい。

このインターンシッププログラムに参加した学生数はこの10年間で88名になる。このプログラムと合同で実施された埼玉大学や鹿児島大学、滋賀県立大学の海外フィールド実習の参加者などをあわせると参加学生数は140名をこえる、これだけの人数による海外プログラムを10年間にわたって何の事故もなくすべて成功のうちに終了できたのは、まさに公団担当職員たちの手厚い保護とおしめない指導のおかげである。その一方で、小松短期大学／公立小松大学と金沢大学の教職員からなるインターンシップ実施委員会の関係諸氏、小松短期大学の長野勇元学長、公立小松大学の山本博学長、金沢大学環日本海地域環境研究センターの長尾誠也センター長ほか両大学の関係のみなさまにはさまざまな支援をいただいた。さらに、在カンボジア日本国大使館ならびに在シェムリアップ日本国領事事務所にはこのプログラムをご支援いただくとともに、両国の友好にかかる諸事業に推薦いただいた。今年度のプログラムは外務省の「日メコン交流年2019」事業に認定されている。これらの関係諸氏にあらためての感謝の意を表したい。

今年度の公立小松大学からの参加学生は国際文化交流学部の1年生2名と保健医療学部の1年生1名の計3名であり、一方の金沢大学からの参加学生は、人間社会学域国際学類の2年生1名、理工学域環境デザイン学類の4年生1名、大学院自然科学研究科環境デザイン学専攻の1年生1名の計3名である（写真1）。なお、このプログラムへの応募者数は、公立小松大学が12名、金沢大学が8名であり、倍率はそれぞれ2倍を超えている。



写真1. ルンタエク・エコビレッジにて

公立小松大学の木村誠准教授が同大学の引率教員として、また、昨年度のプログラムに参加した金沢大学人間社会学域人文学類3年の酒井朋花がチューターとして全行程にわたって学生たちに同行している。このプログラムに時期をあわせて学校教員を対象とする海外

フィールド教員研修「グローバル社会に馴化した教員の育成」を実施した埼玉大学では、教育学部の荒木祐二准教授が現役の学校教員 1 名とともに現地を訪れている。なお、公立小松大学の参加学生たちは同大学の海外インターンシップ助成金 7 万円を、金沢大学の参加学生たちは日本学生支援機構の令和元年度海外留学支援制度の助成金 7 万円を受け取っている。これによって学生たちの経済的負担を約半分に減らすことができた。このインターンシッププログラムの企画・調整から参加学生の募集や選別，実施，そして実施後にいたるまでの日程などは巻末の資料を参考されたい。

6 名の参加学生たちは 3 名ずつの 2 グループに分かれ 2 週間をとおして公団の通常業務に従事したが，2 つのグループに分かれながらも，グループごとにそれぞれの担当業務に従事する日があったり，あるいは両グループが合同で同じ業務に従事する日があったりと業務への従事形態はここ数年と同じく臨機応変のものであった。しかしながら，この業務形態によって，全学生がすべての業務



写真 2. 水路の清掃活動に全員で参加

をひととおり経験することができたとし、また、それぞれの担当業務を深く理解することができたのはむしろ効果的であったといえる（写真 2）。

また、海外インターンシップと海外フィールド研修とでは活動内容が異なるとはいえ、3 つの大学の合同企画としてのこのプログラムの実施は、それぞれの活動の一部を重複させることで学生たちの安全管理体制をより堅固なものにすることになった。植物生態学を専門とする埼玉大学の荒木准教授はカンボジア情勢に習熟した研究者であり、心理学を専攻する公立小松大学の木村准教授はこれまでのこのプログラムへの参加やカンボジアでの独自の研究の開始で十分な現地経験を積んでいる。専門分野がそれぞれ異なる若手研究者 2 名から参加学生たちは専門的な解説を現場で受けることができた。

インターンシップ業務中，レンタエク・エコビレッジで学生たちは記念植樹を行った。業務を離れてバンテアイ・スレイ寺院やバイヨン寺院などの世界遺産の見学にも行った（写真 3）。業務の初日にはアプサラ公団のハン・プウ事務局長がクメール舞踊をみながらの夕食に招待してくれた。最終日には公団関係者や担当職員らがお別れバーベキューパーティを開催してくれた。いずれも参加



写真 3. バイヨン寺院を訪れる

学生たちにとっては忘れえない思い出になったことと思う。

このインターンシップの成果は例年と同様、以下の3点に集約される。学生たちへの「教育効果」、成果の「現地への還元」、そして関係大学の国際貢献にかかる「周知（宣伝）」である。これまでの報告書とほぼ同じ内容になるが以下に記述する。

(1) 学生たちが大きな満足と大きな経験とを確実に持ち帰ることができた。観光地としての魅力がはなやかに喧伝されるばかりの世界遺産であるが、その維持管理や観光客の便宜のためにどれほどの労力とその裏側で費やされているかを公団での業務をとおして参加学生たちは実体験することができた。また、昨今のはやりの言葉である「持続可能」のために、さまざまな苦労がその背後あることを経験した。「最初のイメージとはおおしく違っていた」とは今年も学生の口からもれていた感想である。これとともに「貧しい発展途上国」というイメージが先行するカンボジアの人々のくったくの無い笑顔や熱帯の豊かな自然に学生たちは日々触れることができたし、国際協力の舞台であるとともに地域住民が暮らす世界遺産公園の特異性を目の当たりにもした。「国際貢献」と「地域社会」というふたつのキーワードを学生たちは実体験したことになる。学生たちの報告にはこの2週間の体験が生き生きとつづられている。したがって、このインターンシップでの2週間は学生たちにとってきわめて充実したものだったと客観的に評価される。これはこのインターンシップの実施が学生たちへもたらした大きな教育効果といえる。

(2) 学生たちを指導することによって公団職員に大きな教育効果をもたらした。参加学生たちはそれぞれの担当職員たちとともに公団の通常業務に従事した。学生たちの同行が彼らの業務の支障になった点はないが、インターンシップ終了後に公団上層部から、学生たちの存在が職員たちに大きな教育効果をもたらしたことを例年と同様に指摘された。具体的には、1) 学生たちを担当



写真4. 担当職員による現場指導

することによって職員たちの「説明」の技術が向上したこと、2) 職員たちが説明する「楽しみ」や「喜び」を味わったこと、3) 業務内容の全般を学生たちに説明することで、職員たち自身が業務内容を総括することができたこと、である。これらの指摘はこのプログラムによる成果の現地への還元効果があったことをまさに示すものといえる（写真4）。

(3) 学生たちの活動がアンコール世界遺産公園で大きな話題となった。安全管理の観点から、学生たちはアプサラ公団の制服を着用して日常の業務に従事したが、カンボジアではエリート集団として知られる同公団の制服を日本人の学生たちが着用するのはきわめて目立つものであり、現地の人々や日本語観光ガイドたち、彼らが案内する日本人観光客におおいに注目された。参加学生たちがアプサラ公団のロゴとともに両大学のロゴを制服につけて

業務にのぞんだことも効果的だった。したがって、このインターンシップは世界遺産における両大学ならびにわが国の国際的な貢献活動として一定の宣伝効果をあげたといえよう。

アプサラ公団での海外インターンシップの実績は、10年間にわたる継続によって確立されている。実施母体を公立小松大学に移したことでこのプログラムを将来的に安定して継続するめどもたった。例年どおりの埼玉大学の参加で複数の大学による実施ネットワークも継続できている。アンコール世界遺産が位置するシエムリアップ州と小松市との姉妹都市計画も進行中である。このように、このプログラムの今後の継続的な実施へ向けての明るいみとおしはすでに得られている。しかしながら、その一方で別の問題が浮上してきた。

昨今の学生たちに海外への関心がうすれてきつつあることは以前から全国的に指摘されているが、そんな風潮にもかかわらず、海外へ飛び立ったはずのこのプログラムへの参加学生たちにも、現地への関心や好奇心、積極性などが希薄になってきつつあることを年々感じる。業務以外でのアプサラ公団職員たちとの交流があまりみられなくなった。職員たちのバレーボールの練習に飛び入り参加したり、カンボジアの社会情勢や文化的背景について職員たちと語り合ったりということがなくなった。クメール語を学ぼうという姿勢もあまりない。村を訪れてもお客さんのままであって村人との交流はまずみられない。参加学生同士の仲はきわめてよいものの、さまざまな学問分野を専門とする学生たちが参加しているにもかかわらず、おたがいの専門をふまえての発展的な情報交換や交流もなくなってきた。

その一方で、学生を送り出す大学側の問題もまたみえてきた。プログラムに参加するにあたっての事前学習の大切さはもちろんなのだが、それ以上に重要な、プログラム実施後の事後指導や追跡調査の体制はまだ確立されていない。金沢大学でのこのプログラムの開始当初から指摘してきたことだがこの体制は確立どころか検討すらされていない。現地での実体験にもとづいて、発展途上国のさまざまな問題や文化財、地域社会などにまつわる諸問題などに目を見ひらいた学生たちの、海外への大きな興味や学問への真摯な関心が、プログラム終了後にどンドンしぼんでしまうのをこれまでずっとみてきた。

海外の世界遺産でのインターンシップというこのプログラムは、わが国ではおそらく唯一のものである。アンコールは世界遺産の白眉ともいえる存在であるとともにひとが暮らす世界遺産であり、熱帯の豊かな自然が残っているところとして希有な存在である。現代の学生たちに必要とされる、「国際協力」、「地域貢献」、「文化財」、「環境保全」といったキーワードがアンコール世界遺産にはそろっている。両国政府のあたたかい支援と庇護のもとに実施されてもいる。このような恵まれた環境のもとに実施されているこのプログラムを教育に活用し切れていないと感じる。また、公立小松大学からの参加学生は1年生にほぼ限定されているが、就業体験であるインターンシッププログラムに、高校を卒業してまだ半年にも満たない学生が参加することのよしあしは議論もされていない。

上記の問題点はこのプログラムにのみ言えることではないだろうし、一朝一夕に解決できるものでもないが、両大学の関係者や学内外の関係部局・関係機関との意見交換や、内外の情勢などもふまえながら長期的な視点での改善を考えたい。

3. 公立小松大学でのアンコール世界遺産インターンシップ

公立小松大学国際文化交流学部・准教授 木村 誠

アプサラ公団での学生インターンシップに、今年度は本学から3名の1年次生が参加した。金沢大学において2010年度に始まった本プログラムは、今回が10回目の実施となる。まずは金沢大学教授、そして公立小松大学の特任教授として、平素より本学の国際交流事業に対してお力添えを頂き、本事業においてはアプサラ公団をはじめとする関係各所との調整および学生指導にご尽力を頂いた塚脇真二氏、今年度も本事業への温かいご支援と貴重なご助言を頂いた山本博学長、横川善正副学長、インターンシップの受け入れをご快諾頂いたアプサラ公団事務局長 Hang Peou 氏、アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会の皆様、ほか関係の皆様にご心からの謝意を申し上げたい（写真1）。

本事業は、本学がアプサラ公団との間で締結した「アンコール世界遺産での能力開発プログラム」に関する覚書に基づいて実施されたものであり、本学としては2度目の学生派遣となった。今年度も、参加学生の自覚ある行動と真摯な業務態度、そして関係各位のお力添えによって健康状態や危機管理上の問題もなく成功裏に完了することができたことを大変喜ばしく感じている。本学からは、



写真1. 公団事務局長ハン・プゥ氏と

国際文化交流学部から2名、保健医療学部臨床工学科から1名の学生が参加した（写真2）。今年度の学生募集において特筆すべき点は、国際文化交流学部からの参加学生の志望動機に、昨年度参加した先輩学生からの影響が認められたことである。今年度は4月26日、27日に新入生を対象とした合宿プログラム「きずな合宿」が実施された。昨年度の参加学生は運営スタッフとして新入生とともに合宿に参加しており、昨年度のカンボジアでの学びを新入生に語ってくれたそうだ。昨年度の参加学生にとって、本プログラムの体験がいかに意義深いものであったかが伺える出来事であり、非常に嬉しく感じたことを記憶している。また、本学は開学2年目であるものの、着実に学年を越えた学生間の交流が芽生えていることを知り、喜ばしくも感じた。



写真2. 出発日に小松駅前にて

本インターンシップの業務内容は、環

境保全から観光開発，地域住民の生活支援まで多岐に渡るものであった。この 2 週間の就業体験は，学生が自分自身を考えるうえで，また今後の大学生活の目標を考えるうえでさまざまな示唆を与えるものであったと考えられる。参加学生が何を学び，どのような成果を持ち帰ったのかは，それぞれの報告の中に鮮やかに記されている通りである。

今回学生が派遣されたカンボジアという国に対してどのようなイメージを抱くかは，個人によって，あるいは世代によって異なると考えられる。世界的観光地アンコール・ワット寺院に溢れる観光客を思い浮かべる人もいれば，長く続いた内戦やクメール・ルージュのイメージがまず想起される人もいるだろう。それが現在のカンボジア，そして学生の派遣先であるシェムリアプ州に対する正しいイメージであれ，誤ったイメージであれ，派遣先への認識は参加学生および保護者，送り出す学科の教員の安心感に大きく影響すると考えられる。今回も，参加学生および関係者が安心感を持ってカンボジアへ渡航できるよう，渡航先および現地での業務についての事前研修の充実と危機管理体制の構築に努めた。事前研修では，アンコール世界遺産地域の特色，アンコール遺跡整備公団の役割と業務，カンボジアの歴史と文化などの基礎知識の説明に加え，本学保健管理センター中西美智子様による感染症に関する講座，外務省の旅レジ登録などの渡航準備に関する研修を実施した。これらに対してお力添えとご助言を頂いた本学国際交流センター，学生課，保健管理センターの各位には心から感謝を申し上げます。また，昨年度からの違いとして，前年度の参加学生にも事前研修に参加してもらい，現地での生活などについて有益で実用的なアドバイスを受けることができた。海外渡航が初めての学生たちにとって，終始心強い存在となってくれた昨年度の参加学生，大御悠瑠花さん，肥田望来さん，土橋香乃さん，横井菜美さんにも謝意を記したい。また，本プログラムは外務省の日メコン交流年 2019 の認定事業であること，在カンボジア日本国大使館，在シェムリアプ日本国領事事務所の支援を受けて実施されているということは，危機管理の観点からも特筆すべきことであると同時に参加学生にとっても現地での生活への安心感につながったことと思う。今回のインターンシップ期間中には實取領事事務所所長に直接お目にかかる機会に恵まれた。お忙しい中，学生を激励してくださった實取所長には心から深謝申し上げたい。

今年度の参加学生たちの業務に従事する姿勢は非常に真摯であった。特に 1 日の業務の最後に行う業務報告書の作成の時間に，理解不足の点を学生間で確認し合いながら時間をかけて学習内容や業務上の気づきを整理する姿は印象的であった。金沢大学からの参加者はすべて上級生であったが，彼らに依存するという姿は見られなかった。また，集団生活を送る上で重要な規則の遵守にも



写真 3. 業務中は公団の制服を着用

問題がなく、節度ある行動を心がけてくれたおかげで現地への不適應や体調不良もみられなかった(写真3)。現地での生活への適應には、昨年度のインターンシップ参加者であり、今年度チューターを務めてくれた酒井朋花さんの役割も大きかったことと思う。酒井さんの全行程に渡るサポートは大変心強いものであった。

学生たちは最終日に最終面接を受け、全員無事に合格の判定を受けることができた。担当部門の責任者から修了証書を授与され、彼女たちのインターンシップは終了した。しかしながら、学生たちがこのインターンシップを本当に意味あるものにするためには、帰国後にこの経験をどう活かすかが重要だろう。また、このことは同時に担当教職員が特に意識して対応を考えるべき課題でもあると感じている。

学生たちはカンボジアでの2週間を通じて、様々な学びと自分自身の課題を認識して帰国したことだろう。そのことは、学生達が執筆した報告書からも十分に伺える。これを受けて教員が、「この経験を大切にして、次に活かしてください」と口にするのは容易である。しかし、学生たちがそのための具体的な行動に移すためには、関係する教職員の適切なサポートも必要だろうと考えている。

これまでの経験から、学生によっては帰国後に取り組むべき自分の課題について、適切な目標設定の助言が必要な場合があると感じている。短期のプログラムであれ日常の場を離れた海外という特別な環境に身を置き、充実した日々を送ることで、一時的に学習や海外体験に対する学生の動機づけが急激に高まることは珍しくない。動機づけが高まることそれ自体はもちろん問題ではないが、その高揚感によって、適切な目標を見失う可能性も存在する。その場合、学生は具体的な次の一歩を踏み出すことに失敗するかもしれない。また、個々人が自身に対して設定する要求水準にはそもそも個人差があることから、学生が現地で自覚した自身の欠点や課題については客観的な視点から助言をする必要もあるだろう。私自身についても、これまでそのような学生への帰国後のフォローが十分にできていたとは言い難く、国際交流事業担当者としての課題と感じている。特に、今年度は本学からの参加学生は全員1年次生であることから、その重要性はとりわけ高いだろう。まだ大学に入学して半年足らずであり、専門教育にも移行していない段階の学生にとっては、このインターンシップの経験を今後どう生かすべきか、具体的なビジョンが見えにくいかもしれないからである。ただ、私のこの心配は杞憂に終わるかもしれない。10月31日に開催された本インターンシップの学内報告会において、本学の3名の参加学生は2週間の学びと今後の展望を見事に発表してくれた。まだ大学生活が始まったばかりのこの3人が、それぞれの専門分野においてさらに飛躍、成長してくれることを心から期待すると同時に、プロ



写真4. 休日のリラックスしたひととき

グラム担当教員として、必要に応じたサポートを継続したいと考えている。

今年度も無事に、そして、学生達にとってはかけがえのない思い出を沢山お土産にしてプログラムを完了することができた（写真 4）。最後に、本事業への本学学生の参加のためにご尽力をいただいた関係諸氏に改めて深謝申し上げるとともに、世界遺産でのインターンシップという稀有なプログラムが今後も末永く継続できるよう、本事業への変わらぬご支援を心からお願い申し上げます次第である。

4. インターンシップ参加学生の報告

1) インターンシップを終えて

公立小松大学国際文化交流学部 1年 池田絢香 (グループ 1)

私がこのインターンシップに参加しようと考えた動機は、昨年のインターンシップ参加者の「幸せの価値観が変わるよ」という言葉に惹かれてでした。私はカンボジアに対して「貧しい」、「衛生面が整っていない」などのマイナスの考えを、現地へ行ったこともないのに抱いていました。そこで実際に現地へ行くことで、私の勝手な想像との違いを感じられるのではないかと考えました。

西バライ：11世紀、ウダヤーディチャヴァルマン2世のもとで完成した西バライは、カンボジアで最大の貯水池です（写真1）。「バライ」という言葉は人工的な貯水池という意味を持ちます。西バライの役割は、灌漑、水の供給、地下水の調整、洪水から地域を守る、という主に4つです。山からきた水が東の水門から入り、バライに溜まったあと必要に応じて南門と西の放出口の二つから出ることによって水の量の調整を行います。また、中央にある西メボンは水位を測るという役割を持ちます。中に井戸があり、バライと繋がるのが可能です（写真2）。また、ヴィシュヌ神の像があり宗教的な意味も持っています。公団の方がよくおっしゃっていたことには、西バライは池ではないということです。池は地面を掘りますが、バライは地面を掘らずに別の場所から土を運んできて堤防を建設したそうです。そうすることによって地面との高低差がなくなり、水が自然に高い所から低い所に流れるという利点をもたらします。また、堤防には植物が植えられています。この植物は根が4メートルにも及ぶものがあり、根が地面の下で絡み合うことで堤防を強くします。



写真1. 西バライ



写真2. 西メボンの井戸

北バライ：北バライは地下水の調節が主な役割です。地下水があるということは、地面を強化し建物の倒壊の可能性を軽減することに繋がるので、北バライは重要な建造物だと考えられます。その他にも水の浄化や供給の役割も持ちます。また、この貯水池の中心にはニャック・ポアンという中央塔が建設されていて（写真3）、その周りの東西南北には4つの

小池が配置されています。中央の池と小池が繋がる水路には、北に象、南に獅子、東に馬、西に牛の頭部が彫られた石像があります。この石像の口から水が出るのですが、昔はこの口の部分にそれぞれ薬草を入れて、違う効能を持った池が出来たそうです。そのためか、かつては病院の役割も持ち、多くの病人がこの池に入って病気を治そうとしたらしいです。

クメールハウス：カンボジアの家は暑い気候に合わせた造りになっていて、風通しを良くするために一階部分は開放されています（写真4）。この開放部分で様々な活動を行っていて、雨季には農業や放牧に合わせた活動を、乾季にはスカーフやブランケットを作ったりするそうです。クメールハウスには5つのタイプがあって、一つめは **Khmer House** です。このタイプは位の高い人がかつて住んでいた家とされ、作ることが簡単ではなく費用もかかります。また、屋根はお寺と同じ仕様になっています。二つめは **Rong (Kantaing) House** です。**Kantaing** とは中国からの移民を指し、彼らがカンボジアの気候に合わせて建設したのがこのタイプとなります。比較的作ることが簡単で費用も抑えることができます。三つめは **Rong Dorl House** です。**Rong Dorl** とは屋根が広いことを意味し、増築しやすいことが特徴です。四つめは **Rong Doeung House** です。三つめのタイプから屋根が増えた形となっており、農作業がしやすい事が特徴です。また、屋根から雨が流れやすいです。五つめは **Peth House** です。**Peth** は傾いている、幸せという意味です。最も簡単な作りで、地元の人の家はこのタイプが多いです。家の材料として竹など自然の物が多いそうです（写真5）。

ロヴィア村：ロヴィア村の大きな特徴は、村の真ん中が最も重要な場所と考えられており、



写真3. ニャック・ポアン



写真4. クメールハウス



写真5. クメールハウスの壁材

祈りやお供えをする場所があるということ、また村が丸いということ。村が丸いことで、村人同士が互いに気にかけること、また情報の交換がしやすくなります。しかし最近では、かつて村の中で見なかった、家同士の間に柵を立てるという光景が見られるようになり（写真6）、互いの協力がしにくくなったという現状があります。また、かつて村の家は気候に合わせた造りになっていたのに対して、最近では他の国の家の造りをコピー&ペーストする家が出来はじめました（写真7）。このような家を見た感想は、景観に合っていない、また風通しが良いとは考えられないということでした。

ルンタエク・エコビレッジ：町や村に人が増えすぎてしまったため生活が出来なくなった、また生活に困る人が出てきたそうです。そこで、これまで使われ

てこなかった土地に新しく村をつくり、その村に家族を移動させ、生活水準の改善をはかったのがこのエコビレッジです。今では103家族、約500人もの方が住んでいます。いまだにこの人数は増えていて、子どもが多く、死亡率が低いことが特徴です。また、この村ではツーリズムにも力を入れているそうです。例えば、現地の方が旅行客に地元の伝統的な料理の作り方を教えたり、旅行客を目的地まで送ることを手伝ったり、ホームステイの協力をすることで、現地の方は旅行客から直接お金が手に入るというメリットが挙げられます。しかし、ツーリズムには倫理観の喪失、という点のデメリットもあります。他の観光地では、売春などでお金を稼ぐという人もいるということを教えて頂きました。この村について学んだ時に記憶深かったのは、ツーリズムによる文化の変化は良いこと、だということです。私は、変化というのはその土地らしさがなくなる、という点で魅力を減らすものだと考えていました。しかし、時代にあわせてツーリズムを通し変化していくこともまた大切な



写真6. 家と家とを仕切る柵



写真7. コピー&ペーストとした家



写真8. エコビレッジ

のだと考えられるようになりました（写真 8）。

観光地カンボジア：インターンシップで過ごした 2 週間の間に、カンボジアの様々な場所を訪れる機会がありました。多くの場所で注意書きがあったことが印象に残っています。内容を見てみると当たり前のようなことも多かったのですが、何が当たり前かは人や文化にもよったりすると考えるので、例えば観光地の遺跡が削られることを防ぐためにヒールを履くことは控えてほしい、であるとか、僧の修業が水の泡になってしまうので女性は僧に触ってはいけない、であるとか、その国特有のことも含め改めて何が好ましくないのか注意を促すものがあることは大切だと感じました。その注意書きをもちろん見ない人もいます。どのような工夫をしたら多くの人に注意書きを見てもらえるのか、ということにも興味を持ちました。

カンボジアでの生活：まずカンボジアに着いて驚いたことがバイクの多さです。国が違えば交通手段もここまで違うのか、ということを感じました。物価が日本と比べて安い事もあり、ショッピングやマッサージを楽しみました。何回か寄った市場では、豚の頭や鶏の皮を剥いたものなど日本では見られない光景を見ることができて楽しかったです（写真 9）。



写真 9. 市場の豚

朝昼夜全てのご飯が美味しくて、毎日の楽しみにもなっていました。特にマンゴーシェイクは私のお気に入りです。アモックと呼ばれるカンボジアの郷土料理もとても美味しかったです（写真 10）。動物も多く、牛やバッファローの群れとすれ違った時の高揚感は忘れません（写真 11）。また、カンボジアでは、本当に多くの方が笑顔で親切でした（写真 12）。なので、お世話になった方の一人が「カンボジアの人は昔笑わなかった。不細工の国とも言われていた。」とおっしゃったことが本当に衝撃でした。戦争が終わったばかりのころは治安も悪く、人の心も満たされていなかったからだと考えられます。この国の人々が今こんなにも素敵な笑顔を見せているのは、お世話になった公団の方々をはじめ多くの人の努力でもたらされたものなのだと感じ、言葉では表現できない熱い気持ちになりました。私の生活を振り返ってみても、今私が笑えているのは家族や友達をはじめ沢山の人がお世話になっているからなのだと、当たり前の日常に感謝することもできました。



写真 10. アモック

さいごに、このインターンシップに応募した動機「幸せの価値観が変わる」というもの。幸せとは何なのか明確に表現することは私にはできません。しかし、多くのものに溢れた生活を送ることで、大きな家に住むこと、などでもなく、笑えること。これが一番の幸せなのではないかと今は考えます。また、カンボジアに実際に行って感じたことは、貧しいなどのマイナスなものではなく、高揚などプラスなものがほとんどでした。勝手に作り上げたイメージと実際のずれが大きくあることを、今知ることが出来て良かったです。私に幸せの指標を与えてくれ、また異国の文化や雰囲気を知る楽しさを教えてくれたこのインターンシップに参加できたことは私の人生の大きな財産です。関係者の方々には感謝しかありません。本当にありがとうございました。



写真 11. すれ違ったバッファロー



写真 12. 笑顔のかわいい子どもたち

2) アンコールインターンシップを通じて

金沢大学人間社会学域国際学類 2年 高畑悠歌 (グループ 1)

8月17日から9月1日まで、アンコール遺跡整備公団（アプサラ公団）のインターンシップに参加した。インターンシップに参加するのは初めてで、緊張と同時にカンボジアでの2週間の暮らしにとてもわくわくしていた。アンコール・ワットという世界的に有名な世界遺産に関わることでできるインターンシップは他になく、また東南アジアにも興味があったためこのインターンシップへの参加を希望したが、自分が想像していた以上のことをたくさん学ぶことができた。

今回、私は西バライでの業務に関わったが、西バライ以外にも様々な場所に連れて行ってもらえた。西バライは11世紀、スーリヤヴァルマン1世の治世に建造が開始され、ウダヤーディチャヴァルマン2世の代で完成したアンコール地域最大のバライ（人工貯水池）である。東西8km、南北2.2km、総貯水量5,600万m³になり、周囲は土でできた堤防に囲まれている。遺産保護の観点から、伝統的な工法である土で修復しなければならないと定期的な修復が必要だということだ。定期的な修復は政府から予算が出され、地域住民が投入される。これが地域住民に対し仕事を供給することにもつながっているようだ（写真1）。



写真1. 西バライの堤防の修復の様子

また、堤防の強化のために植林や草を植えることも行われており、植物の根が網のように絡み合うことで、堤防が強化される。植林にはカンボジアの在来種が用いられ、育苗地もいくつか整備されている。西バライの主な役割としては、灌漑、生活用水の供給、地盤の保持、洪水の防止があげられる。中でも私が驚いたのは地盤の保持である。アンコール地域の寺院は砂の層の上に基礎が建てられており、砂の層が水分を蓄えていないと寺院が崩壊する恐れがある。そのため地下水は遺跡の保護という観点からも欠かせないものになっている。

西バライの中心にはヒンドゥー教寺院の西メボンがあり、現在修復中だが、バライの水位を計測する目的がある。西メボンの中心には井戸があり、バライの中に溜まった水を吸い上げ同じ水位になるようだ。井戸の中は波の影響を受けないため、正確な水位を計測することができる。また、西バライと西メボンはヒンドゥー教における海を表現するなど、象徴的な役割も果たしていた。さらに、西バライには2か所の水門と1つの放水路がある。北東部の水門の奥には、シェムリアップ川から流れ込む水の中の砂や泥などを取り除く池があり、ここで約80%の堆積物は除去することができる。そのため、西バライに流れ込む水はある

程度きれいになり、水門が詰まることなども防げる。さらに、この池に溜まった砂や泥は緊急時（部分的に堤防が崩壊したときなど）の修復に用いられる。

西バライは自然の傾斜により、北東部が高く、南西部が低い。そのため自然に水が低いほうへ流れるので水の供給に動力がいらない。一番低い南西部に放水路を設けることにより、水が溜まり放水路の高さを超えれば、そのままバライの外側に流れる。このように自然法則もうまく使いながら、約 1000 年前に作られたバライを修復し、昔ながらの形を保ちつつ住民生活などに生かしている。

現在利用されているもう一つのバライである北バライは、12 世紀に建造された東西 3,600 m、南北 960m の人口貯水池である。こちらにも中心にニャック・ポアンといわれる寺院を持つ。ニャック・ポアンは医療目的で作られたといわれており、ニャック・ポアンの周辺には薬草が多く生えている。中央祠堂の周りには 4 つの池が作られ、それぞれの池に薬草の成分が溶け込んだ水を溜め、患者をその中で沐浴させることによって、治療を行っていたのではないかという研究がされているそうだ。北バライの中には多くの木が植えられているが、その多くは枯死しており、枯死した木による水質汚染が心配されているが、水が溜まったバライと枯れた木という情景が人気を集めており、除去はなかなか進んでいない。

水管理以外にも、住民支援などの業務にも関わらせてもらえた。カンボジアにはクメール建築という伝統的な家の建築法がある。このクメール建築は、伝統的な景観の保護だけでなく、カンボジアの気候、生活、文化に根付いたものである。まず気候について、年間を通じて気温が高く、エアコンなどの整備が不十分な場所では、自然の風が重要になる。一階部分に壁のない高床式で、風を通しやすい建材を床や壁に用いることで過ごしやすくなる。次に生活についてだが、多くのクメール人は農業従事者である。一階部分で収穫した農産物などの管理を行い、夜休む時のみ、二階部分に入る。これはカンボジアの文化ともかかわるが、伝統的に二階部分には神や精霊が宿るとされ、神聖な場所であると認識されてきた。

さらに、家の建材は木や竹など、修復が簡単で軽いものが用いられている。そのため土台部分も大掛かりに杭やコンクリートを打ち込む必要がない。いまだ発掘されていない遺跡や遺物などが発見される可能性があるため、それらを傷つけることのない伝統工法が好ましいとされる。実際に伝統的な家屋が多く残るロヴィア村も訪れた。一階では漁業用の網を作る人々がいて、二階部分では幼い女の子が昼寝をしていた。しかし最近では田舎の村でもコンクリート造りの家が見られるようになり、景観保護や伝統保護の面から問題として捉えられている。また、村の中におけるプライバシーの考え方の広まりにより、家の周囲に塀が作られ、住民同士のつながりが希薄になっているのだという。

また、ルンタエクというエコビレッジも訪れた。この村は、アンコール地域の余剰人口を移すために作られた。家屋は伝統建築によって建てられ、住民はほぼ自給自足の生活を送っている。産業としては、モリンガという健康サプリメントのもとになる植物や様々な野菜などが育てられている。また、現地には観光客が滞在できるゲストハウスがあり、ルンタエクを訪れる観光客は年々増加傾向にあるらしい。プロモーションは主に SNS を通じて行われ、

台湾の企業と協力していることもあり、観光客の約 75%は台湾人である。ただ、ルンタエクはシェムリアップ市街から離れており、便利な立地とは言えない。そのためなかなか住民の移住が進まないという問題もある。

バンテアイ・スレイやバイヨン、タ・プロームやアンコール・ワットなどの著名な観光地も見て回ることができた。バンテアイ・スレイはアンコール・トムからは少し離れた場所にあり、遺跡公園のような形で整備されている。遺跡の修復はフランスとスイスによって行われ、規模は小さいが多くの観光客が訪れていた。バンテアイ・スレイの周囲はボートによる周遊やバードウォッチングのポイントとしても整備されており、そこで観光客が支払った代金がきちんと地元住民に還元されるような仕組みになっている。

バイヨンはアンコール・トムの中心寺院で、54の塔とその4面に彫られた216の菩薩像（ジャヤーヴァルマン7世の顔という説もある）で有名である（写真2）。カンボジアでは、古くから9が神聖な数であるとされ、塔の数も菩薩像の数も、合計すると9になるように計算して作られているらしい。壁面にはレリーフが施され、チャンパとの戦いの模様が伝えられているが、中にはクメールの人々の普段の生活を表しているものもあり、兵士間でいたずらをするなど、クスリと笑ってしまうような彫刻もあった。タ・プロームは東バライの南方に位置する寺院で、日本のアニメ映画のモデルになったともいわれている。内部は木による浸食がひどく、またそれが幻想的な雰囲気を作り出していた（写真3）。この木を撤去することも考えられていたが、内部を浸食した木は、遺跡を支える柱の役割も果たしており、今も議論がなされている。その他にも多くのアンコール時代の遺跡を巡り、時代による建築方法の違いなどをじっくり見ることができた。



写真2. バイヨン寺院



写真3. タ・プローム

問題は観光客の側にもあり、落書きや座り込みなどによる遺跡の損傷も多い。さらに、観光客の服装や日傘などの色があまりにも派手で、世界遺産としての景観にそぐわないという問題もある。加えて、観光客の問題だけにとどまらず、ガイドなど現地の人々の行動も問題となっている。触れてはいけない遺跡の壁画や彫刻に触りながら説明を行うなどして、遺跡に損傷を与えている面もある。アプサラ公団は遺跡を見るためのガイドラインを制作し、各

遺跡の入り口などに設置しているが、どのくらい浸透しているか疑問な部分はある。

また、市街地でも問題は見受けられた。地球環境の変化により、雨が少ない地域では水不足が、雨が深い地域では洪水などが起こるようになってきているという。水不足の解決のために、トンレサップ湖からシェムリアップ市街にパイプを通し水を供給するという計画が進行している。JICA の支援により進められ、25,000 m³の水はトンレサップ湖から、18,000 m³はバライから供給するという見通しになっている。しかし、トンレサップ湖は雨季と乾季で水位の上下が激しく、また水質汚染や寄生虫などの浄水処理についての問題が多く残っている。また、道路と排水について、スコールが比較的長時間降った日には道路が水没し、場所によっては車のタイヤが半分水に浸かるほどになる日もあった。排水用の側溝などは準備されているものの、雨が少なかったせいで泥や砂が溜まり詰まってしまったため、浸水が起こってしまったらしい。ちょうど帰宅時間だったのもあるが、浸水した道をバイクで帰るのは大変だろうと思うので、急な天候の変化にも対応し、安全も確保できるようなインフラの整備が必要になるだろう。

カンボジアでの暮らしについて、思っていたよりずっと快適だった。私たちが滞在したのはカンボジア北西部のシェムリアップという町で、アンコール世界遺産群を有し、観光都市として発展を続けている。観光拠点ということもあるだろうが、治安が良く英語でのコミュニケーションが比較的容易だった。特にフルーツが絶品で、新鮮で安く日本ではなかなか食べられないフルーツをたくさん食べることができた(写真4)。夜になってもナイトマーケットやパブストリートのあたりは賑やかで、金沢ではなかなか体験することができない空気感が新鮮だった(写真5)。

業務開始から1週間経ったところに、私たちが滞在していたホテルの隣で結婚式が行われていた。カンボジアでは結婚식을3日間するらしいということは塚脇先生から聞いていたが、2日目には夜中まで大音量で音楽を流しながらパーティーをしていて、その振動がホテルの部屋にまで伝わってくるほどだった。また、フランスの植民地だったこともありパンがおいしいというのは新しい発見だった。1ドルから高くても2ドルしないくらいでおいしいハード系のパンが



写真4. 市場で売られているフルーツ



写真5. パブストリート

食べられて、朝ご飯にはもってこいだった。植民地、と聞くとあまりいい印象を持つことは少なく、実際にいい面も少ないこともあるが、持ち込まれた文化すべてが悪いものではないということがわかった。

東南アジアでよく見られるトゥクトゥクの勧誘はすさまじく、「オネイサン、トゥクトゥク」と日本語で声をかけられると、乗らないにしても足を止めそうになってしまった。同時に、街の市場で買い物をしたときや、村で見かけた子どもたちに、片言ではあるがクメール語で「オークン（ありがとう）」や「チュムリアップソー（こんにちは）」とあいさつをしたときに、合掌しながら「オークン」と返してもらえると、自分の気持ちが相手にしっかり伝わっているとわかって嬉しかった。日本で、お辞儀の角度によってお辞儀の相手や意味が変わるように、カンボジアでも合掌の位置によって表す相手が変わるそうだ。私たちはほんの少ししかクメール語がわからず、現地の人々もクメール語以外の言語に詳しいわけではない。しかし、塚脇先生のおっしゃる“愛嬌と低姿勢”によってコミュニケーションを円滑に行うことは可能であると実感した瞬間だった（写真6）。



写真6. カンボジアの子どもたち

アンコールインターンシップを通じて、たくさんの人々に出会った。言葉も文化も歴史的なバックグラウンドも全く異なる人々との交流を通じて、国際交流において必要なものを肌で感じる事ができた。言葉も通じない私たちにやさしく微笑みかけてくれるカンボジアの人々が大好きになった。また今回のインターンシップを通じて、自分が勉強したいことが見えてきた。海外支援を考えるうえで、その国に何が必要なのか。実際にその国で生活することで、問題を認識しそれに対する支援を行うことができる。例えば、現代的な家の建築を推奨することは、カンボジアにとって必要なことではない。現地の人々が必要とする支援を適切かつ迅速に行うことが、先進国に住む私たちにできることではないか。もちろん、今回私たちが滞在したのはシェムリアップで、シェムリアップ以外の地域のことはなにもわからない。これからもカンボジアについてもっと学び、またカンボジアを訪れたい。

最後に、安全かつ快適にこのインターンシップを終えることができたのは、先生方、チューターの朋花さん、運転手のペンさん、スタッフの皆さんのきめ細やかな指導とケアによるものである。そして2週間一緒に学んだ仲間たちとも、わからないところはお互いに確認したり教えあったりして、インターンシップをより有意義なものにすることができた。アンコールインターンシップに参加してよかったと心から思えるのは、なによりたくさんの人々に支えられているからだ。このインターンシップに関わる全ての人々に感謝を申し上げます。終わりにしたいと思う。本当にありがとうございました。

3) アンコールインターンシップで得たもの

金沢大学理工学域環境デザイン学類 4年 奥村颯太 (グループ 1)

8月17日～9月1日にかけて2019年度アンコール遺跡整備公団インターンシップに参加した。私がこのプログラムに参加を決めた理由は大きく二つある。一つ目はインターンシップの業務内容が大学での自分の専門分野に大きく関わっていたことである。受け入れ先である国立アンコール遺跡整備公団(以下APSARA公団)はアンコール世界遺産を維持管理する国立の組織であり、自然環境や文化財の保護、住民支援、観光整備など様々な業務がある。その中でも水管理部門では世界最大の人工貯水池である西バライやアンコール遺跡周辺の水位や水質を管理しており、大学で学んだ水理学の知識を生かすことができるのではないかと考えた。また座学で学んだ内容が実際の現場においてどのように活用されているかについても学びたいと考えた。アンコール世界遺産を含めカンボジアは私が初めて訪れる地であったため、現地の文化の保護や住民の地域支援の現場がどうなっているのかという点についても大変興味があった。二つ目の理由は海外での研修を通じた実践的な英語力の向上である。私はこれまでロシアや中国で学生交流などを目的として短期留学に参加し、英語を使ったコミュニケーション力の向上を図ってきた。これらの参加によって参加前よりある程度の能力はついたと考えているが、これがインターンシップという業務の場においてどれだけ応用できるかを試してみたいという思いがあった。現地は基本的にクメール語が公用語であるが、APSARA公団の職員との会話やディスカッションはすべて英語であり、英語を使う絶好の機会であると考えた。

アンコール遺跡があるカンボジアのシェムリアップ州に到着し、街を歩く中でまず私が抱いた印象は「意外と街として発展している」というものであった。一般にカンボジアと聞いて浮かぶ印象としては、発展途上国であり道路などインフラの整備も十分でないというものが多と思う。しかし街中には高層ビルなどはないものの、飲食店やマーケットが多くあり、パブストリートと呼ばれる



写真1. パブストリート周辺のナイトマーケット

繁華街もある(写真1)。また観光客が多いことから高級ホテルを含めた宿泊施設が多くみられたのも印象的であった。水道や電気も問題なく使うことができ、生活する上では不便を感じなかった。シェムリアップ中心街では様々な国の観光客が見られ、特に中国人や日本人を含むアジア系の観光客が多い印象を受けた。オールドマーケットと呼ばれる現地の市場を歩いても「お兄さん」と日本語で話しかけて接客する店員が多いことや、市場の商品

のほとんどが観光客向けのお土産であったことには驚いた。この地において観光収入が大きな割合を占めており、その役割がいかに重要視されているかを実感した。

ここで現地での生活について少し触れたいと思う。カンボジアは雨季と乾季に分かれており、気温は 30 度近くで東南アジアらしい高温多湿の気候であった。私たちが訪れた 8 月は雨季であり、1 日に 1 回は集中した雨量のスコールが降るが私たちが訪れる前までは雨季であるにも関わらず雨量が少なく、シェムリアップ州全体で深刻な水不足であったという。この水不足がアンコール遺跡にもたらす影響については後に述べたいと思う。物価に関しては日本に比べて安く、ホテルは一泊 15 ドルほど、食事は 1 食 5 ドルあれば十分に行うことができた。Amok と呼ばれるココナッツミルクの入ったカレーや Lok Lak と呼ばれるカンボジア風の牛肉のステーキは非常に美味しかった。またカンボジアは高温多湿であることからマンゴーやドラゴンフルーツなどを使ったシェイクは程よい甘みがあり、インターンシップに参加したメンバーからも人気であった。日本ではあまり食べることのないカエルやコオロギも食べることができ貴重な経験となった。ちなみに、コオロギはエビに似た味で香ばしく、個人的には好みの味であった。交通手段は車やバイク、トゥクトゥクによるものが主であり、所々で渋滞が発生するものの円滑に進んでいるように見えた（写真 2）。一方、路面は中心部では塗装されているが、少し離れると赤土のままであるところもあり、日本と比べると路面状況は良好ではなく、これから整備が必要であると感じた。現地の治安は良く、スリにさえ気をつければ安心できる。また現地の人は基本的に皆優しく笑顔で接してくれるため、心地よく過ごすことができた。これからアンコールでのインターンシップに参加される学生諸君にはぜひ参考にしていただきたい。



写真 2. 勤務地までは公団職員のバイクで移動

ここからはアンコール遺跡とインターンシップの業務内容について述べようと思う。今回のインターンシップでは、アンコール遺跡を維持管理する APSARA 公団の水管理部門と住民・地域支援部門で主に業務を行った。アンコール・ワットを含むアンコール遺跡は 13 万人もの住民が世界遺産の中で生活をしており、「人が暮らす世界遺産」として知られている。しかし近年、アンコール遺跡の中で生活する住民が増え続けており問題となっている。住民たちが使う水は主に地下水であり、住民が増えることでアンコール遺跡一帯の地下水の水量が減ってしまう。アンコール遺跡が建っている地盤は砂地盤であり、通常であれば砂が含む水分によって安定しているが、地下水が減少することで砂地盤は不安定になり、遺跡が傾いたり崩壊したりする危険性がある。その解決策となっているのが住民・地域支援部門が主となって進めている、郊外への余剰人口の移動である。具体的にはアンコール遺跡から

少し離れた場所に「エコビレッジ」という新しい村を作り、もともとアンコール遺跡の中にいた住民たちを住ませるといったものである。

私たちは業務の中で実際にエコビレッジを訪れ、村での生活や活動内容を視察した。村の主な収入源は観光と農作である。アンコール遺跡を訪れた観光客がエコビレッジを訪れ、クメールの家庭料理やホームステイ、文化交流を楽しむというものである。また、農作ではムクナやモリンガといった植物を育て、サプリメントにして販売するなどしている。しかし、シェムリアップ中心街から距離があることや、もともとアンコール遺跡に住んでいる土地を手放したくない住民がいることなどから全ての余剰人口を移動させることは難しいという。また、観光が活発になることでこれまでの村の雰囲気や文化が失われるのではないかと懸念もされている。日本でも白川郷のように世界遺産となり、人が訪れるようになることで観光地化され、それまでの静かな雰囲気が無くなったという例がある。観光資源としての活性化と現地文化の保護は切り離すことのできない問題であり開発の難しさを感じた。

私が業務内容の中で特に印象に残っているのはアンコール遺跡の中の水管理である。冒頭で少し述べたように、アンコール遺跡群の中には「バライ」と呼ばれる人工貯水池が東西南北に4つあり、その中でも西バライは5,600万 m³ もの水を貯水することができる世界で最も大きい人工貯水池である（写真3）。



写真3. 西バライの水量はやや少ない

バライの役割は大きく4つあり、灌漑・水の供給・地下水の補給・洪水の防止である。先ほど述べたように今年にはシェムリアップ州全体で水不足が深刻であり、バライの水量は少なかったが、公団の職員によると下流のトンレサップ湖からポンプで水を組み上げるなどして対応しているという。バライには排出口が2種類あり、一つは土地の高低差から自然

に流れ出るもので、もう一つは水門の開閉によって管理するものである。これによってバライ内に十分な水量がある時、水圧によって堤防が崩壊するのを防いでいる。また、バライの中心部には「メボン」と呼ばれる寺院があり、その修復が現在なされている。メボンはバライの中心にあるため風による波の影響を受けにくく、バライの水位を測定するのに適しているという。メボンは島ようになっており、島の中の堀にバライ内の水が地下水を通して流入することで、水位が測定できるという仕組みである。このように水理学の知識が応用された例を数多く知ることができ、大学での勉強が生きていることを実感することができた。公団の今後の課題としては市街地への水の安定的な供給と遺跡の早期修復、またエコビレッジの長期的な開発と生活の支援が挙げられると考える。

今回のインターンシップは全体を通して、以下の3点の理由から非常に充実したものであった。一つ目はAPSARA公団の職員の手厚いサポートである。勤務地までのバイクでの

送迎から業務中の説明，ディスカッションや業務後の報告書のアドバイスまで 1 日を通して我々の面倒を見ていただいた。また APSARA 公団の職員の説明はとても丁寧で，わからない点を聞くとわかるまで熱心に教えていただいた。また，業務以外にも我々の体調を気遣ったり雑談をしたりと親身に向き合っていたことで，こちらも安心して，思う存分業務に取り組む事ができた。二つ目はこのインターンシップが将来を考えるきっかけになったことである。業務内容は大学での勉強に結びついており，将来の仕事に対するイメージをつかむ事ができた。また今回のインターンシップでは英語力の向上も目標としていたが，結果としては，英語を聞き取り，理解はできたものの，自分の意見を正確に英語で伝えることの難しさを痛感した。今後は自分の意見を英語で発信する場を多く作り，能力の向上に努めたいと思う。三つ目は今回のインターンシップに引率いただいた先生や参加したメンバーに恵まれたことである。塚脇先生・木村先生には全日程を通して，我々の危機管理やインターンシップの様々な手配等で大変お世話になった。また，チューターである酒井さんには昨年の経験をもとにアドバイスや健康管理をしていただき，大変頼もしい存在であった。参加したメンバーは 1 人ひとりが個性的で明るく笑顔で協調性があり，とても居心地のいいメンバーであった。このように周りの素晴らしい人々に恵まれたことで，2 週間の様々な学びの中で自分自身の大きな成長に繋がったと考えている (写真 4)。この場をお借りして深く感謝申し上げたい。



写真 4. お世話になった運転手のペンさんを囲んで

4) インターンシップに参加して

公立小松大学国際文化交流学部 1 年 宮島柚果 (グループ 2)

8 月 17 日から 9 月 1 日までの約 2 週間、アンコール遺跡整備公団インターンシップに参加した。私が本インターンシップに参加した動機は大きく分けて二つ挙げられる。一つ目は、大学 1 年生という早い時期に海外に行き、今後の学習に役立てたいと思ったからである。学校内で他国の言語や文化、国際交流について学ぶ機会が多くあるが、実際に海外に行き、価値観を広げることは、これらの学習に大きく影響を与えると感じた。また、自分の英語能力を試し、今後の英語学習の方針を立てたいと思った。二つ目は、世界遺産の中に人々が暮らしているという極めて特殊な環境に興味をひかれたからである。

私たちのインターンシップ先となったのは、国立アンコール遺跡整備公団 (アプサラ公団) である。アプサラ公団は、アンコール世界遺産を維持管理する国内組織で、多岐に渡る業務を 14 の部門に分かれて行っている。私たちはその中で主に水管理部門のほか、地域住民支援部門の下で業務を行った。最初の 1 週目は、全員で西バライ、北バライ、ロヴィア村、クメールハビタット、ルンタエク村などに赴き、幅広い業務内容を学んだ。2 週目は、それぞれグループの業務地に赴いたほか、遺跡の視察を主に行った。

業務の報告として、まず主に水管理について、アンコール地域の地形や北バライの構造とそこで計画されている活動を中心に述べていく。アンコール地域は、北東のクーレン山から南西のトンレサップ湖にかけて傾斜しており、その傾斜に沿って、運河や河川、バライなどの貯水池や地下を水が流れている。この傾斜の利点は、バライや運河にある水門を開け閉めすることで、下流に流れる水量を調節できることである。しかし、洪水が起こりやすい地形でもある。

バライの中では最も上流に位置する北バライは、12 世紀につくられた南北 930m、東西 3,600m のバライである。別名ジャヤタタカと言い、「ジャヤ」は当時の王であるジャヤバルマン七世を意味し、「タタカ」はバライを意味する。そもそもバライとは、ダイク (堤防) に囲まれ、中心に寺院を持つ人工的な貯水池のことである。北バライの現在の役割は、洪水を防ぐことと地下水を調節することである。地下水を調節するのは、寺院を支える砂は水を含むことで強度を増すからである。北バライの水は、アンコール・ワットやアンコール・トムといった主要な遺跡にも流れるため重要な役割を果たしていると言える。しかし、北バライの近くのバンテアイ・プレイという寺院は崩壊が進んでしまっていた。また、中



写真 1. バンテアイ・プレイ

央の木が倒れてしまう危険性を感じた（写真1）。

北バライは、過去には水の供給と病院としての役割を果たしていた。この二つの役割は、北バライの中心にあるニャック・ポワンと呼ばれる寺院の構造と大きく関係している。北バライの水は地下を通過して寺院の周りの中央の池を満たし、そのあと、水はけ口を通過して周囲の四つの小さな池に入る。地下と水はけ口を通過した水は、人々に飲み水として供給され、また、四つの小さな池では、それぞれ薬草を用い、異なる種類の薬を作ることができた。このようにして、先ほど述べた水の供給と病院という役割を果たしていた。また、現在はパイプが利用されているが、かつての水吐き口には像があり、北の象は水を、南のライオンは火を、東の人間は大地を、西の馬は風を象徴している。真ん中の寺院はブッダを象徴し、そこにはナーガが巻き付いたような彫刻がある（写真2）。ニャック・ポワンの「ニャック」は、ヒンドゥー教の神話に出てくる蛇のナーガを意味し、「ポワン」は、絡み合う姿を意味する。



写真2. ニャック・ポワン

ジャヤバルマン七世は仏教を信仰していたが、人々の信仰の自由を認めていたため、この寺院だけでなく、バイヨンでも仏教とヒンドゥー教が共存していた様子が見てとれる。クメールハビタットでは、カンボジア土着の精霊信仰についても学び、また、北バライで育てている木は、ダイクを保護したり、航空写真で運河を見分けたり、食用にするとといった役割を持つほかに、カンボジアの人にとってのアイデンティティでもあるという話を聞いたときには、カンボジアの思想に触れることができたと感じ、興味深かった。

北バライで現在計画されている活動は、昔ながらの釣りや、サイクリングロードの整備、観光客をボートに乗せ、その利益を村人が共有するというもの、村人が観光客へのガイドをし、お金を得ることによって、子供たちがお土産を売るのをやめ学校に通えるようにするというもの、そして村で商品作物を育て、観光客に売るといったものがある。また、北バライ付近の運河と村をつなぐ工事や、2週目に参加させていただいた運河の清掃には、多くの人々が参加し、報酬を得ていた。村人に現金収入をもたらすものが多く計画されていると感じた。

次に、住居や村の伝統的な形態と現在の様子について、主にロヴィア村とルンタエク村での業務を通し学んだことを述べていく。伝統的なカンボジアの住居は高床式で、一階はオープンスペースになっている。空気が木や地下を通過することで空気の温度が下がるため、この建築様式はカンボジアの気候に適している。また、村は円形になっており、人々はお互いの健康状態を確認しあい、物々交換もしていた。しかし、近年村の外で現代の建物を見た人々が、コンクリートと窓ガラスでできた家や塀をつくっている。コンクリートでできた家はとて

も暑く、また、建てるのには深く穴を掘り、杭を打ち込む必要があり、それが原因でアンコール地域に埋まっている遺跡が破壊されてしまう可能性がある。人々のつながりも希薄になることも想定できる。古くからあるというロヴィア村を歩いていて、自分の想像以上に多くのコンクリートの家や塀が既に作られており、あるいは建設を行って衝撃を受けた(写真3)。今までは、新しい文化



写真3. ロヴィア村

化を取り入れる理由は、主に利便性の追求であるというイメージがあったが、それだけではないように感じた。プライバシーの意識が強まったからという理由も考えられているが、そうであるならば、何らかのきっかけがあるようにも思われた。また、この問題に対処するには、村人と公団側の認識や価値観を共有する必要があると感じた。また、破損したと思われる塀を見かけたが、コンクリートやガラスといった自然に帰らない物が村に持ち込まれることで、この先破損した塀や窓ガラスが蓄積してしまう危険性を感じた。

ルンタエク村は、ロヴィア村をモデルにつくられた広さ約9ヘクタールの村である。現在、103家族が暮らしている。アンコール世界遺産公園では、人口増加から景観を守るために、2004年から公園内に新たに住居を建てることが禁止されている。そこで、新しく家庭を築いた人々に移住先を提供するプロジェクトとして、このルンタエク・エコビレッジプロジェクトが始まった。かつては、様々な問題があったそうだが、この村で育った子供たちが成長したことや、寺院ができたこと、農業ができる場所や観光計画もあり、このプロジェクトは軌道に乗りつつある印象を受けた。海外からの観光客は、2018年の8か月間で、538人である。観光客は、ホームステイや田植え、料理や釣りをすることでき、ここで生じた利益は村人の現金収入となる。ただし、観光は、ブームが終わったあとに収入や仕事がなくなってしまうことや、文化を破壊するというマイナスの側面があると聞いた。観光地付近のレストランの味が落ちてしまったという話をよく耳にしたが、これもこの文化の破壊に当てはまると思った。

最後に、遺跡の視察で感じたことを述べる。まず感じたことは、ゴミ箱が非常に多く設置してあり、とてもきれいであったことである(写真4)。また、遺跡の保護と修復には、担当する国の価値観の違いが表れていた。入れ替えた石やレンガに印をつける国や、印をつけず見てもわからないようにする国、色で明らかに



写真4. ゴミ箱

入れ替えたことがわかる修復方法をとっている国などがあった。バンテアイ・スレイでは店の配置や道などが整備されていたが、お寺がパーツとなってしまうことや、同じような店が並ぶことで競争が激しくなるといった問題点があることを知った。しかし、問題点だけではなく、自然を利用したボートや釣り、食事といった観光客向けのサービスで、現地の人の収入につながる取り組みもあった。このように、様々な国が維持管理に関わることには、何が正しいと断言できないことや、問題点や良い面があることがわかった。これらの業務を経験する中で、塚脇先生が事前研修でおっしゃっていたように、水管理、地域住民支援、環境保全、観光開発は密接に絡みあっていると思った。これらのバランスをとることの難しさや、幅広い分野の知識を得ることの大切さを感じた。

カンボジアでの生活は、初めての海外ということもあり、見るものすべてが新鮮で充実していた。最初はバイクに乗れるか不安だったが、風が気持ちよくすぐに乗るのが楽しみになった。食べ物はどれもおいしかった。シェイクは毎日のように飲んだが、特にマンゴーシェイクはとてもおいしかった（写真 5）。スーパーやコンビニもあり、生活に必要なものはだいたい揃うと感じた。そして、何よりもインターンメンバーと過ごした時間は非常に楽しかった。なんでも気軽に話せるだけではなく、とても尊敬できる人達に出会うことができた。

この 2 週間を通し、想像以上に多くのものを見聞きし、今までよりも視野が広がったと感じた。しかし、自分の知識や経験の足りなさや、英語能力の低さを痛感した。なんとかスペルを書いたり図を描いてもらったりして公団の人とコミュニケーションをとっていたが、やり取りできる情報量の少なさを感じた。最後の面談では、会話が全然うまくできず、申し訳ない気持ちになった。そんな中でも、真摯に私の話を聞いてくださった公団の方々や、手助けしてくれたインターンメンバーや先生方のおかげで業務から多くのことを学ぶことができた。これから、地道に英語を勉強し、幅広く学習することでさらに視野を広げたいと思う。最後に、本インターンシップに参加するにあたり、お世話になったアプサラ公団の皆様、塚脇先生、木村先生、大学関係の皆様、チューターの朋花さん、インターンシップメンバー、現地の方々には心から感謝している。



写真 5. マンゴーシェイク

5) インターンシップを終えて

公立小松大学保健医療学部臨床工学科 1年 鳥生真衣 (グループ 2)

8月17日からの2週間、カンボジアでのインターンシップに参加しました。私は、インターンシップへの参加はもちろん、海外へ行くことも初めてだったので何もかもが新鮮でたくさんのことを学ばせていただきました。このプログラムに興味を持った最初のきっかけは海外に行ってみたくらいという気持ちがとても強かったからです。しかし、インターンシップ説明会でアンコール遺跡の管理保全や、そこに住む村の方達を支えている APSARA 公団の仕事の聞いたり、先輩方から去年の体験談や感想を聞いたりすると、本当に楽しそうでとても充実していて学べるプログラムということがひしひしと伝わってきたので、これはぜひとも私も参加したいと思いました。

まず何が一番不安だったかというとはやはり言葉でした。英語はあまり得意ではなく、今までも学校の授業以上のことはやってこなかったもので、聞き取れるか話せるかが本当に不安でした。そして案の定、APSARA 公団の方々とディスカッションした1日目はほとんど理解できなくて焦りました。しかし、今年は参加メンバーが少なかったためほとんど6人一緒の日が多かったので、わからなかったことは他の5人の誰かに聞いて教えてもらったり、その日学んだことを復習しあったりしてたくさん支えてもらいました。また、公団の方々も私がわからないところを聞き返したら簡単に言い直してくれたり、スペルや図を描いて説明してくれたりしてとても親切にしてくださいました。そのおかげで苦手な英語も頑張れましたし、だんだんと理解できることが増えて嬉しかったです (写真1)。



写真1. 英語でディスカッション

カンボジアに着いて最初に驚いたのはバイクの多さでした。車に乗っていると、次々とすぐ横をバイクが追い越して行ってひやひやしました。また、2人乗りが上限なのかと思えば、3人、4人、多ければ5人が1台のバイクに乗っていて本当にびっくりしました。日本にいれば2人乗りを見ることもあまりないので初めは新鮮でしたが、公団の方と一緒に



写真2. バイク移動

移動するときはバイクだったので後ろに乗っていると風がとても気持ちよくて、ずっと乗っていたかったくらいです（写真 2）。また、道路の横断は慣れるまではとても怖かったです。バイクや車がたくさん来る中、隙間をくぐるように渡っていくので最初は先生についていけないと無理でした。交通整備された日本を基準に考えていたら逆に危険だなと感じました。現地のルールを知ってそれに自分が合わせる大切さを感じた一つでした。

買い物にはスーパーや市場へ行きました。スーパーは日本とほぼ同じで、違うところといえば果物の豊富さくらいでした。市場では初めて値段の交渉をしました。どちらかという私が折れてしまうことが多かったのですが、貴重な経験ができました。ここでも見たことないような果物がたくさんあり、なかでもマンゴスチンは最高に美味しかったです。ココロギもカエルもせっかくだからと



写真 3. 果物の女王マンゴスチン

思ってみんなで食べましたが、意外とおいしくてなんというか悔しかったです（写真 3）。

APSARA 公団での業務についてです。まずは、アンコール遺跡周辺の水の管理について学びました。一言でアンコール遺跡といってもその規模は大きく、乾季と雨季があるカンボジアでは水の管理は欠かせません。そのため、アンコール遺跡には東西南北に四つのバライと呼ばれる貯水池があります。今は北バライ、西バライにしか水はありませんが、その役割は「水の供給」、「灌漑」、「地下水」、「洪水の防止」です。雨季には洪水を防ぐためにバライに山から流れてくる水を貯めて、乾季にはバライの水門を調節することで必要なだけ水を各地に送ることができ、人々の生活水や農業用水などを支えています。山、バライ、人の生活圏の順で標高が低くなっており、水は自然の力のみに流れるので、水門の調節だけで良いそうです。

私は主に北バライについて学びました。北バライは南北 960m、東西 3,600 mのバライと、その真ん中にニャック・ポワンというお寺があります。中心に行くまでに一本道を通るのですが、私たちが訪れた時期は幸か不幸か、全くバライに水が入っていないというレアな状態だったので、バライの中の枯れた木が目につきました（写真 4）。この木が水質汚染の原因となっているそうです。それな



写真 4. 北バライの枯れた木々

らばすべて切ってしまう方がいいのと思ひ、どうしてところどころまだ木が残っているの

か聞きました。すると、水の中に生えている木が幻想的で美しいと観光客から人気が出てしまい、切るに切れない状態だということでした。後で水の入った北バライの写真を見ましたが、確かにとても美しく、これを見るために北バライに行く観光客は多いだろうと感じました。自然保護も観光業もどちらも守ることは簡単なことではないと感じました。遺跡の中心のニャック・ポワンは4つのポーン（ため池）に囲まれていました。水位が上がると周りのポーンにそれぞれライオン・馬・人・象の石造の口を通して水が流れ込む仕組みです。特別に中まで入らせていただきました。そうやって水位を一定に保っているのですが、昔の人の知恵に驚くばかりです。この遺跡内にあった水はどこよりもきれいで、周りには薬草が多かったことから病院としての役割もしていたそうです。

別の日にはクメールの伝統建築について学びました。クメールの家は基本的に高床式で、普段は一階のスペースで生活します。風通しが良く、二階の部屋の中でも床板の隙間から風が入ってきて涼しかったです。また、屋根の形によって5種類の家に分けられます。これを学んだあとに実際にクメールの村に行きました。まず目にしたのは元気な子供たちの姿です。塚脇先生の操作するドローン



写真5. 村の子どもたち

を食い入るように見つめる子供たちがとても愛らしくて、思わず写真を撮ってしまいました。少しでも教えてもらったクメール語で「こんにちは、お名前は？」と聞くと、「こんにちは！」と返してくれる子もいれば、恥ずかしがって隠れてしまう子もいて子供の可愛さはどこも変わらないなと嬉しくなりました（写真5）。

しかしながら、やはり村には問題も多いようです。まず、アンコール周辺の人々の7割が貧しいというのが現状だそうです。実際にアンコール内を歩いていると物乞いをしてくる子供達がいる、しかし無視するしかなくとても胸が苦しくなりました。また、8割の家庭にトイレがないため衛生面にも問題があるようです。2025年までに一家に1トイレがあるようにするため、村人へトイレの重要性を教えたり設置費用を支援したりして、人々がより良い暮らしができるように様々な努力している APSARA 公団の取り組みを学びさらに関心を持ちました。



写真6. APSARA 公団の方々と

私にとって今までで一番大きな挑戦といっても過言ではない、このカンボジアでのインターンシップ。たくさんの学びや関心、思い出を得ることができまし

た。この経験は私のこれからに大きくいい影響をもたらしてくれると思います。最後に、このインターンシップにあたってたくさんのことを教えてくださった塚脇先生，私たちに精神的に支えてくださった木村先生，アンコールエリアを案内し説明してくださったAPSARA 公団水管理部門の方々，移動でお世話になったペンさん，チューターとしてリードしてくださった朋花さん，一緒にたくさんのことを学んだ優さん，颯太さん，悠歌さん，柚果，絢香，本当に最高のメンバーに恵まれました。関わってくれたすべての方に感謝したいです（写真 6）。

6) アンコールインターンシップを終えて

金沢大学自然科学研究科環境デザイン学専攻 1年 佐藤 優 (グループ 2)

8月17日から9月1日までの2週間、アンコール遺跡整備公団(以下、アプサラ公団)での海外インターンシップに参加させていただきました。今回は、私の参加動機、現地での生活、インターンシップを経験して学んだこと、感じたこと、今後取り組んでいきたいことの順に2週間の体験をお伝えできればと思います。

私がアンコールインターンシップに参加した動機は2つありました。一つ目は、インターンシップの内容に興味を持ったためです。私は大学からのメールでこのインターンシップの存在を知り、説明会に参加しました。実際に過去に参加したメンバーから詳しい業務内容や現地での様子を聞くことができ、自分の興味は一段と増しました。また、私は高校時代の地理の授業が好きだったことや自然が多い環境で育ってきたことから、大学に入っても世界遺産に興味を持っており、世界遺産がある場所や歴史について自分で調べたりしていました。そのため就業地が世界的に有名なアンコール世界遺産であり、その世界遺産を保全する業務に携われることは非常に魅力的だと感じていました。

二つ目は、インターンシップの業務内容がこれまで勉強してきた専門分野に関連があったためです。このインターンシップでは、アンコール世界遺産のエリア内に住む現地住民の生活に必要な水資源の管理や、エコビレッジ建設による新たな居住地の提供など、人々の生活基盤、インフラを支える業務に携わることができます。また、私は学部時代に環境デザイン学類で土木について学び、大学院では土木計画グループの研究室に所属して活動しています。普段はPCでデータを解析する理論研究のため土木の現場を目にする機会はありません。そこで業務を通して、このインターンシップの特徴である「住民とアンコール世界遺産の共存」という点から、理論とは違う実践の難しさを学びたいと考えました。そして実践面の学びを今後の理論研究に反映させ、理論と実証のすり合わせに経験を活かしたいと思いました。

しかし、これらの動機を持ちながらインターンシップへの参加を心に決めるまでに、私は非常に多くの時間を要しました。なぜならば、日本での就職活動の時期とインターンシップの時期が重なってしまうからです。大学院の修士1年生の夏休み期間は就職活動が始まる時期でもあります。時間を無駄にしたくないという思いや、インターンシップに参加して大学院での研究活動以上の学びを得ることができるのかなど、様々なことを考えました。それでも最終的には、一度きりの人生でアンコール世界遺産に観光客として訪れることはあっても、保全業務で携わることができるのはこのインターンシップだけだと考え、参加を決意しました。今振り返ってみると、この時期の就職活動以上にアンコールインターンシップの2週間は貴重であったと感じるため、自分の判断は正しかったと自信を持って言えます。このような背景がありながら、私はアンコール世界遺産のインターンシップに大きな期待を

持って参加しました。

ここからは現地での生活面に関して述べていこうと思います。まず食事についてです。カンボジア滞在中、朝食は各自で調達してホテルで済ませ、昼食と夕食はメンバー全員で飲食店に行き食事をしていました。私は朝食にバナナをよく食べていました。現地のマーケットで売られているバナナは1本の大きさが小さく、2口ほどで食べることができます（写真1）。前日に食べ過ぎた場合は翌朝にバナナの本数で調整できるため、非常に重宝していました。ちなみに私の場合、朝食で食べたバナナの本数の最高記録は5本でした。他のメンバーには滞在残り2日で12本残っていたバナナを食べきったという人もいたようです。また自分たちが滞在したホテルと道を挟んで反対側にある別のホテルでは、18時以降半額でパンや半生菓子が売られていたので、業務の後に良く買いに行き、朝に食べていました。特にマドレーヌがしっとりとしていて美味しく、自分のイチオシでした。



写真1. 市場の豊富な種類の果物

昼食や夕食では、現地のカンボジア料理はもちろん、ハンバーガーやカレー、中華料理など様々な料理を食べていました（写真2, 3）。そのため、日本での食事とあまり変わらない感覚でした。ただ、塩コショウやスパイスを効かせた味付けが中心だったので、2週目前半あたりからは味噌や醤油が恋しくなったのを覚えています。毎日メンバーと盛り上がりながら、時に想像できない料理や飲み物をオーダーして挑戦することが非常に楽しかったです。また東南アジアの料理には香草が多く入っていて好き嫌いが分かりますが、自分の好みで入れるか入れないかを選択できるのが基本だったので、香草が苦手なメンバーも食事に苦労することはなかったようです。



写真2. フードファイトが始まったある日の夕食



写真3. 1番美味しかったロックラック

そして天候についてです。私たちが滞

在した8月は、カンボジアでは雨季に当たります。しかし今年は例年より雨が少なく、貯水が十分ではなくなるほどでした。カンボジアでは短時間で滝のように雨が降るスコールが発生します。そのスコールも私たちが滞在して2日目に初めて発生するような状況で、それまではほとんど雨が降っていなかったそうです。さらに、その日まで雨がずっと降っておらず、側溝が落ち葉などで詰まって雨水が流れなかったことが原因で、街中で洪水が起きていました。足が水に浸かりながらバイクを運転していたり、大きな水しぶきを上げながら車が移動していたりしました。また現地に出向いて業務を行うときも雨に打たれることは一度もありませんでした。おかげで折り畳み傘を持っていくだけの雨対策だった私でも2週間なんとか凌ぐことができました。私たちにとっては活動しやすい天候でしたが、現地の人々にとっては雨が降らないと水不足になってしまうため、少し複雑な心境で過ごしていました。

次にこのアンコールインターンシップに参加して自分が感じたこと、考えたことについて話したいと思います。一つ目は、「観光開発のあり方」についてです。カンボジアでは観光産業が国の経済を支えており、今後も観光を盛り上げていく必要があります。ですが、観光の両面性に着目しなければならないことを学びました。それはルンタエク・エコビレッジの見学と説明を受けたときの「観光とは“火”である」という言葉に集約されます。火

は食材を加熱でき料理になくなくてはならないものですが、場合によっては家を燃やしてしまうものでもあります。観光に当てはめて考えると、観光は国や地域にお金をもたらしてくれる反面、現地の人々の生活を激変させたり景観や自然が取り壊されたりという点もあります。生活を豊かにするための観光業が、これまで創り上げてきた文化やコミュニティを破壊してしまつては本末転倒です。ルンタエク・エコビレッジでは現地の人々の生活を疑似体験するプログラムを行っていました。またガイドを現地の人担当する川下りツアーという事例も、塚脇先生が参画していたため紹介していただきました。今後はこのようなモノを売る観光ではなく、コト消費となる観光を推し進めることで、文化や歴史を保全しつつ観光客



写真4. トンレサップ湖をバックに



写真5. 野生のサル

に知ってもらい、観光業がより良くなっていくのではないかと感じました（写真4, 5）。

二つ目は、「発展と幸せ」についてです。私は実際に現地に行く前、カンボジアは発展途上国で非常に苦しい生活をしている、その現状を見に行くんだと思っていました。しかし、楽しそうに走り回っている子どもたちやお土産を買ったときに店員さんが見せる笑顔、楽しそうに笑い声をあげながら空港で働く人たちを見て、カンボジアの人たちはとても幸せな生活を送れているのではないかと感じました（写真6）。自分が見たものはほんの一部で、シェムリアップという比較的発展している場所に滞在していたからかもしれませんが、発展途上国というにはふさわしくありませんでした。そして「カンボジア＝発展途上国＝貧しい＝幸せじゃない」という自分の固定観念は間違っていたと気づきました。先進国だけが幸せではないし、発展し資本主義経済が浸透することが全国民の幸せとは限りません。アンコール世界遺産は人が住んでいる世界遺産だからこそ、現地の人の笑顔や小さな幸せを守り続けていってほしいと思いました。そして日本で安全に暮らせること、蛇口をひねれば飲料水が出てくること、トイレがあること等がいかに幸せであるかということを改めて実感しました。



写真6. 人懐っこい現地の子どもたち

三つ目は、「働くことの大変さ」です。今回のインターンシップの業務は、現場に行って感じたことをまとめ、公団の職員の方と議論するという流れでした。少し大げさかもしれませんが、現地の人々の生活をより良くかつアンコール世界遺産を保全するという、答えのない大きな課題に立ち向かい続けるのはとても大変でした。仕事をするには現状を正しく理解することが前提となると思います。現状を把握できなければ問題点がどこにあるのかわからず、改善策を考えることができません。どんな仕事であれ問題を解決していくには、長時間動いたり考えたりする体力がベースとして必要だと感じました。また平日に業務に従事し迎える休日は、日本の学期期間中の休日とくらべて価値が大きかったです。一生懸命働いたあとの休日というのはすごく貴重で、だからこそそ有意義に過ごせました。少し社会人の生活を体験したような感覚になりました。

このアンコールインターンシップの2週間の日々で、かけがえのない経験を積み、自分自身をまた一歩成長させることができたと思います。しかし、自分の力不足を感じることもありました。特に英語に関して、自分の不甲斐なさを痛感しました。自分が専門に勉強してきた土木業界は、発展途上国のインフラ整備に関与する機会が多く、将来海外が勤務先になる可能性があります。そこで海外で活躍する人材になるために、学生のうちから実践で使える英語を学びたいと考えていました。しかし今回のインターンシップでは、意見や考えを伝える際に思うように単語が出てこなかったり、文法が崩壊した英文を書いてしまっていた

りました。また公団職員の方が丁寧に説明して下さっていても、英語を聞き取れずに理解に苦しむ場面もありました。自分が思っている以上に英語の基礎を忘れてしまっていることは非常にショックで悔しいと感じました。今後は自分の現状をしっかりと受け止め、英語を基礎から徹底的にやり直し、いずれは海外で仕事をするためのツールにしていきたいです。他にも、本質を見抜く力を高めていきたいと思いました。見たものをそのまま鵜呑みにするのではなく、その背景や理由をもっと深く考えられるようにしたいです。これは、カンボジアの歴史や水管理のシステムを学ぶ中で感じたことです。表面だけでなく現在に至る経緯に注目すると、あらゆる課題を適切に解決できるようになるはずで。この物事の本質を見抜く力は、日常生活から意識して少しずつ鍛えていきたいと思います。

このようにカンボジアでの 2 週間は業務を通して自分の力を試す機会となり、現時点の自分の能力を客観的に知る機会にもなります。同時に、カンボジアの伝統や文化を自分の目で直接確かめながら学ぶことができ、観光で訪れた時とは全く違う体験をすることもできます。私はこの素晴らしいアンコールインターンシップを多くの人に薦めたいです。初めて海外に行く人は、自分の視野が大きく広がる経験になるでしょう。日本では当たり前のルールが海外では全く違ったり、口に合わない食べ物を食べると現地の人がこの食事で生きていることに感動したりするかもしれません。アンコール・ワットに行けることに一番の魅力を感じている人は、観光地の魅力の裏にある努力やマイナス面を知ったり、世界遺産を保全していく業務の責任の大きさを感じられたりするはずで。

また就職活動前にこのインターンに参加する人にもおすすめします。海外で働くイメージを明確にできますし、貧富の格差などの資本主義経済がもたらす弊害を見て、働く意義や仕事に求めるやりがいについて深く考えるきっかけになると思います。いずれにせよ時間が豊富にある夏休みの 2 週間で有意義に過ごしたい人にとって、このインターンシップは非常に価値があるといえます。私自身もインターンシップに参加した価値をより高めるために、一緒に参加したメンバーとどんな学びがあったのかを今後共有し、他者の学びを自分のものとしていきたいです。そしてインターンシップ参加後も互いに切磋琢磨していけるような関係をメンバーと築いていきたいと思います。

2 週間という短い期間でしたが、自分の体験や学びの裏にはたくさんの方の支えがありました。英語が聞き取れなかったり理解できなかったりした部分があっても最後まで真摯に教え続けてくれたアプサラ公団の方々、私たちを安全に引率して下さった塚脇先生、木村先生、毎日いろんなところに送迎して下さり移動中に安心して眠れるほど信頼できるドライバーのペンさん、インターンに参加するにあたって事務手続きをして下さった大学職員の山本さん、原田さん、陰ながらたくさん準備に力を貸してくれたチューターの朋花さん、金沢大学、公立小松大学から一緒に参加した 5 名のメンバー、そして自分を快く送り出し日々支えてくれる家族に心から感謝します。この 2 週間で共に過ごしたメンバーに最大の恩返しができるよう、これからの国際社会で活躍できる人を目指し、私は努力し続けていきます。本当にありがとうございました。

5. チューターの報告

1) 2度目のカンボジア

金沢大学人間社会学域人文学類 3年 酒井朋花

8月17日から9月1日までの2週間、カンボジアのアンコール遺跡整備公団（APSARA 公団）でのインターンシップにチューターとして参加しました。今年度の参加学生は金沢大学の2年生、4年生、院1年生から1人ずつと公立小松大学の1年生から3人、とやや変則的な組み合わせでした。チューターの私は3年で年上の方はどちらも男性だったので多少の不安はありましたが、真面目で熱心な学生ばかりで大きな問題なく無事にインターンシップを終えることが出来ました。

チューターとしての仕事は、金沢からシェムリアップまでの引率、現地での学生の体調管理と行動把握、食事の際の集金が主なものでしたが、今年は学生の数が6人と少なかったためチューターの負担はほぼありませんでした。金沢からシェムリアップ間の移動に関しては、羽田からはほとんど木村先生に道案内を任せきりになってしまったので、私とはとにかく誰も逸れないように最後尾を歩くようにしていました。せめて羽田のターミナル間のバスなど国内の移動だけでも入念に調べて木村先生をサポートできればよかったと反省しています。到着してからは昨年と同様、ホテルの部屋割りや携帯ショップ、市場等に行きました。この時、私は昨年購入した自分の携帯に番号を入れ直したのですが、なんと恥ずかしいことに通話料金を入れ忘れていて1週間ほど使えない携帯を持っていたのです。発覚した時は穴に入りたい気分を通り越して穴を掘りたいくらいの気分でした。

業務は参加学生が6人なので今年は3人ずつの2グループでしたが1週目は全員一緒に行動しました。そのため先生方と私も同行することができ、チューターとしての仕事も少なかったです。午前中は公団の職員とバイクで水門や貯水池、遺跡といった現場に赴き（写真1）、午後は公団本部でのディスカッションを通して、午前中に学んだことを整理したり疑問点を質問したりして学びを深めていました。職員の方とのディスカッションを終えた後も自分たちの疑問点が解決するまで話し合っていた学生たちの姿が印象的でした。今回は2グループで半分以上全員行動だったため知識はほとんど共有していたうえ、どちらもバライのグループなので貯水池に関して深く学べるようになっており、学生の専攻とも合わせて最適な構成だったと思います。

今年度の最も大きなイベントは2週目初日の運河の清掃活動ではないでしょうか。町の人々総出で草を刈り、ゴミを拾い、水草を排除しました（写真2）。公



写真1. バイクでの移動

団職員は監視の役割が大きかったように見えました。学生たちは最も安全なゴミ拾いを手伝いました。テレビの取材も来ており、私たちも APSARA 公団の制服を着た日本人学生ということで取り上げられ、ちょっとした有名人でした。

個人的に印象が強いのは Run Ta Ek での活動です。私が参加した年はちょうど土砂降りの雨が降り、予定していた植林も村の見学もできずに終わってしまったのですが、今年は天候に恵まれて植林までこなすことができました。なんとチューターである私も昨年できなかったからか自分の木を植えさせていただいて、現金だが今年も来れてよかったとしみじみ思いました。ぜひすくすくと育てて欲しいです(写真3)。

もう一つ昨年と違ったのは1週目の前半に埼玉大学の荒木先生グループとの活動も多かったことです。荒木先生は植物の専門学者で、社会人研修の鈴木さんは特別支援学校の先生でした。普段は話すことのないような方と同行できたことで、様々な視点からの話を聞けたり新しい知識をいただけたりと、私にとっても大変勉強になったし、学生たちにとっても良い刺激になったと思います。

休日は、業務で訪れない遺跡を観光した後、オールドマーケットで買い物をしたりカフェで涼んだりマッサージで癒されたりと思い思いにカンボジアを満喫していました。今年はマッサージにハマった学生が多く最終日もマッサージ店に足を伸ばしていました。

今回のインターンシップでは2人体調を崩した学生がいましたが、2人とも1日休むと回復してまた元気に活動していたため安心しました。今年は人数が少なくチューターの仕事も少ないと予想していたため、できることはなんだろうと考え色々な薬を多めに持っていったのが幸いしました。また、今年は異常なほどに雨が多かったです。私たちが行くまで半年ほど降っておらず水不足に悩んでいると言われても信じられないほどでした。スクールも短時間でやまないことが多く、度々夕食の時間まで降り続けていました。昨年スクールを経験していた私は、念には念を入れて雨合羽を2つと折りたたみ傘を1つ持ってきていたため、雨具を持っていない学生に貸し出すことができました。役に立てて良かったです。



写真2. 清掃活動



写真3. 私の木

カンボジアのスクールは傘では到底守りきれないので雨合羽を強くお勧めします。

はじめは水不足ということでバライにはほとんど水がなく、スラ・スランというかつての王の沐浴場もすっからかんの状態だったのが、私たちの滞在中スクールが続いたおかげで、少しずつ水が溜まっていく様子が観察できました（写真4）。アンコール遺跡は水の王国とも言われるほどなのにこんなにも水のないアンコールは大変珍しい、と学生たちは若干がっかりしながらもポジティブに捉えていました。



写真4. 水がないスラ・スラン

最後に、カンボジアの人、景色、会話、様々なものから毎日刺激を受けてチャレンジ精神を胸に活動する学生たちの姿は私にとっても刺激となり、1年前のことを思い返しながらも新たな視点を加えてカンボジアを味わうことができました。以前はなかった新しい村ができていたりロヴィア村に扉や仕切りが増えていたり、一年は決して短い時間じゃないのだと感じました。このような貴重な機会を再び与えてくださった塚脇先生にはとても感謝しています。終始頼りきってしまった木村先生、ありがとうございます。いつも真面目に勉強する姿に尊敬の念が深まります。そしてこのインターンシップに携わってくださった皆さま、今回も温かく受け入れてくださった公団職員の方々、現地で出会った全ての人へ、心から感謝いたします。

6. 埼玉大学の海外フィールド教員研修報告

1) 埼玉大学の海外フィールド教員研修

埼玉大学教育学部生活創造講座・准教授 荒木祐二

公立小松大学と金沢大学とが実施する海外インターンシップに埼玉大学が合流するのは今回で 9 度目となる。埼玉大学の教育学部や大学院教育学研究科の海外フィールド実習として、これまでの 8 年間にのべ 18 名の学生たちがこの実習に参加した。参加学生たちは、カンボジアの豊かな自然や世界的な文化財、人々の伝統の暮らしに直に触れることができた。この現地での濃厚な体験は、近い将来、教育にたずさわる学生たちにとって、社会のあり方や自分がやるべきことを深く考える契機になったことと思う。

この海外フィールド実習の、教育学部学生の教育プログラムとしての有用性についてはこれまでの報告書で述べてきたとおりであるが、その一方で、目まぐるしく変貌しつづける教育の現場で活躍する学校教員にとっても、このプログラムはまたきわめて効果的なものとする。カンボジアのアンコール世界遺産において、世界遺産公園の世界的な文化財と自然環境、地域住民との調和的な共存の理解を図り、その保全や活用に関する国際協力事業や、地域社会における人々の暮らし、子どもたちとの触れ合いを実際に体験することで、学校教員の国際理解を促すとともに、このような実践的な体験を通じて、環境や教育を国際的な視野で捉える感性が養われ、グローバル化に適応する資質の向上が期待できるものとする。

そこで、本年度については、現役の学校教員を対象とする海外フィールド研修「グローバル社会に馴化した教員の育成」としてこのプログラムを実施した。参加者は福島県立石川支援学校の鈴木宏子教諭の 1 名のみであったが、この研修の現役教員への国際理解プログラムとしての有用性は十分に確認することができた。以下に、本年度の活動を簡単に振り返る。

筆者らが合流したのはインターンシッププログラムの学生一行が現地に着する前日となる 8 月 17 日の朝であった。到着後、ホテルに投宿ののちに、プログラム運営のために先に現地入りしていた金沢大学の塚脇真二教授とともに



写真 1. トンレサップ湖での観測実習



写真 2. イスラム系住民の結婚式

にトンレサップ湖を訪問し（写真 1）、植物生態学を専門の一つとする筆者がトンレサップ湖を特徴づける浸水林やそこで自然とともに暮らす地域住民の生活などについて説明した。トンレサップ湖のさまざまな特徴については塚脇教授に説明いただいた。水上集落の住民の暮らしや子どもたちの教育問題には鈴木教諭はおおいに関心をもった様子であった。湖からシェムリアプへ戻る途中には、この地域で暮らす住民の結婚式の様子を垣間見る機会を得た（写真 2）。カンボジアでは少数派となるイスラム系住民の結婚式であったが、美しく着飾った新婦に鈴木教諭は興奮しきりであったし、見ず知らずの旅行者でしかない筆者らをこころよく受け入れてくれる人々のやさしさには感銘を受けたように見受けられた。

その翌日となる 2 日目に、世界遺産公園の中をひとめぐりしたのちの夕食でインターンシッププログラムの学生たちと対面した（写真 3）。3 日目には、学生たちとともに世界遺産公園の中にあるいくつかの遺跡やプラダック村の民家、在シェムリアプ日本国領事事務所を訪問し（写真 4）、同日の午後にはアプサラ公団の本部で開催されたインターンシッププログラムの始業式に出席した。夕食は学生たちともどもアプサラ公団のハン・プゥ事務局長にご招待いただいた（写真 5）。

その後の現地滞在期間、埼玉大学グループはアンコール世界遺産内外でフィールド研修を行った。なかでも、アンコール世界遺産公園内の余剰人口の移住先であり、また、伝統的なカンボジア村落の復興をめざして建設されたルンタエク・エコビレッジでは、小学校の中に入れていただき、教室の雰囲気やそこで学ぶ子どもたちの様子を鈴木教諭には見てもらい、また現地教員との交流を短時間ながらも味わってもらった。カンボジアに来なければ味わ



写真 3. インターンシップ学生たちとの夕食



写真 4. プラダック村の民家を訪問



写真 5. 夕食会のあとで

えないフィールドワークの醍醐味を体感し、現地の人々の暮らしや小学校、子どもたちの学びの様子を見学するというきわめて貴重な経験が鈴木教諭にはできたと思う。この報告書に収録されている鈴木教諭の報告にその体験が生き生きと綴られている。

公立小松大学と金沢大学の海外インターンシップは活動全体が醸成され、受け入れ側となるアプサラ公団も毎年の恒例行事として参加学生たちの指導に習熟していることが、今年度の参加によってさらによく理解できた。今後も、学生たちの成長を後押しする本活動にかかわらせていただくとともに、これに時期をあわせての埼玉大学の学生向け海外フィールド実習や現役教員向けの海外フィールド研修を継続していけることを願っている。末筆ながら、この度の渡航でもあらゆる面でお世話になった塚脇教授をはじめ、埼玉大学グループをさまざまに気づかっていたいただいた公立小松大学の木村誠准教授、全面的にご支援いただいたアプサラ公団のハン・プウ事務局長ならびに公団の職員のみなさん、その他ご支援いただいた関係各位に心より感謝申し上げます。

2) 海外フィールド教員研修 「グローバル社会に馴染んだ教員の育成」に参加して

福島県立石川支援学校・教諭 鈴木宏子

8月16日に福島県を出て、8月17日にシェムリアップの地に降り立った。東南アジアに行くのは初めてで、カンボジアは以前から興味を抱いていた国であり、とても楽しみにしていた。研修の機会を与えてくださった荒木先生には感謝している。

シェムリアップ空港で飛行機から降りて辺りを見渡すと、だだっ広い平地と開放感いっぱい空が目に飛び込んできた。私はこのカンボジアの空気感をとても気に入った。大喜びして「わーっ！」と声を上げたかったが、カンボジアという国を思うとなんとなく陽気になりきれなかった。初めて出会ったカンボジア人は、運転手のペンさんだった。荒木先生たちと15年ほどの親交があるらしく、とても笑顔が輝く男性だった。彼だけでなくカンボジアには表情の明るい人がたくさんいると感じた。

その後、トンレサップ湖を見学した。そこで金沢大学の塚脇先生と出会えた。塚脇先生は、少し日本人離れた顔立ちに、笑顔の素敵な品のあるおじさま的な印象で、少し得体の知れないオーラを放っていた。トンレサップ湖に向かう途中、車の中で建物や道路などについて説明を聞いた。目に写る光景は、どこか東日本大震災を思い出させるものだった。ボートに乗り換えてトンレサップ湖を見学した。茶色い水の上に、少し雑多な感じのする風景が広がっていた。ここでは水上で生活する人々を初めて見た。休憩場所の水上レストランでは、子どもの首に蛇を巻かせて、観光客からお金やお菓子を受け取る親たちを見た。お金を渡す観光客と、それを見ている自分がその場に一緒にいることに心が痛くなった。この子たちは、どんな環境で育っていて、大人たちもどんな気持ちでその行動をし、どんな教育を受けてきたのだろうと考えた。この切ない気持ちは、カンボジアにいる間ずっとぬぐえなかった気がする。トンレサップ湖から船着き場に戻り、塚脇先生と荒木先生は、近くの集落でドローンを飛ばして調査を始めた。その二人を見て、新鮮な気持ちになった。カンボジアの地で、ドローンという最新技術に初めて触れた。ドローンを飛ばす先生方の周りに子どもや犬が集まってきた。屈託のない笑顔と興味津々の表情に、どこの子どもも変わらないと感じたが、ここで暮らす子ども達は、日本の子どもよりどこか落ち着いているように見えた。犬も同様であった。首輪はなく、リードでつながれているわけでもない。子ども達と犬の穏やかな表情を見て、幸せな気持ちが芽生えた(写真1)。



写真1. ドローンに集まる集落の子どもたち

その帰り道の沿道で結婚式を見かけ

た。「結婚式を見せてほしい」と頼むと、なんと快諾して中に通してくれて、食べ物や飲み物まで準備してくれた。装飾の色合いや衣装のデザインなど、東南アジアの雰囲気を間近で感じられた。車でプノクロムに登ると、ピクニックをしている人たちがいた。遺跡内でピクニックをすることにまず驚いたが、それを関係機関に報告する業務を担っている塚脇先生にも驚いた。正直なところ、このときの私は同行している先生方の仕事をあまり理解していなかった。そうこうしているうちに1日目が終了した。

2日目、公立小松大学と金沢大学の学生達と公立小松大学の木村先生と出会った。学生達は、互いに出会って間もなく、まだ交流がはかれていない感じで、どこか不安で緊張しているようにみえた。大学生と接するのは学校に教育実習生を迎える程度なので、とても新鮮であり、懐かしくも思えた。年齢のギャップに苦しむと思ったが、選ばれてきた学生達だけあって、考えや受け答えがしっかりした印象だった。木村先生は背が高く、 트렌ディドラマにでも出てきそうな風貌で、カンボジア感の少ない印象があり、塚脇先生や荒木先生とは違った雰囲気をもっていた。聞けばそのはずで、塚脇先生や荒木先生は自然科学を研究対象とする一方、木村先生の専門は心理学だった。専門分野の違いでこんなにも雰囲気が違うのかと思い、改めて多様な専門分野の視点で研究する必要性と、それを一つのチームとして取り組む重要性を感じる事ができた。この日は、北朝鮮が建築した歴史ミュージアムを見学し、その後にスラ・スランやネアック・ポアンに水が張られていない光景を見たり、プラッ・カーン寺院で遺跡内に絞め殺しの木があることを知ったりして、大自然のスケールを肌で感じた(写真2)。



写真2. プラッ・カーンの絞め殺しの木

3日目、プラダック村の民家を訪れ、米麺を作っている地域住民の暮らしを見学した。その後、領事事務所へ行き所長と職員の方々と昼食を共にし、アプサラ機構(アンコール遺跡整備公団)も訪問した。学生達は2週間ここで仕事に従事すると聞き、素晴らしい取り組みをしていると感じた。副部門長が挨拶の際に「アプサラ」について話をしていて、「アプサラダンス」の紹介と「アプサラ機構」の活動に関する説明だったが、とにかく「アプサラ」という言葉を連呼して笑わせようとしてくれた。しかし、それを面白く感じていたのは私ぐらいで、学生達は誰も表情を変えていなかった。学生達はその後に英語での自己紹介を控えていて、とても緊張していた。副部門長の話を聞きながら、学生達は頭の中で自己紹介の練習をしていたのかもしれない。ぎごちない表情ではあったが、一人一人しっかりと自己紹介だった。むしろ一番動揺したのは私だったと思う。自己紹介を終えてほっとしたのもつかの間、学生達はその直後からアプサラ職員たちとの意見交換など、英語での打ち合せに取り掛かった。その夜の食事では、学生達はさすがに疲れているようにみえた。

4日目の朝、学生達が各大学のエンブレムがついたアプサラ機構の制服に身を包み、車に乗り込む姿を見た。日に日にたくましくなっていくのがわかった。学生のときにアンコール遺跡の保全整備に携わるという貴重な経験をしていることをうらやましく思えた。その経験は、世界の環境を考えるきっかけにもなるだろう。徐々に変化する学生と接して、若さとは、こんなにも順応性があり、忍耐力、吸収力があるのかと感心した。学生のうちにこのような体験をすることで、見聞を広げ、人間としての幅を広げるに違いない。今後もこうした機会を学生に与えていただき、未来の人材育成に尽力してほしいと強く願った。なお、チューターの存在は、初めてカンボジアを訪れる学生たちにとって、確実に心の支えになっていた。チューターの学生自身も、2度目の訪問を通して心や感覚の変化があるだろう。

この日は、ルンタエクのエコビレッジを訪問し、小学校の中に入ることができた。教室の掲示物などを見て、何をどのように学んでいるのか垣間見ることができた。小学1年生の教室に入ったときに、なんと乳幼児がいた。先生の赤ちゃんだそう(写真3)。なんて素敵なことだろう！私も、自分の子どもを職場である学校に連れてきて働きたいと何度思ったことか。学校に託児所があったらな・・・と。この村は、人工的に作られた村だと聞いて驚いた。この取り組みで救われた人々もいるだろうけれど、その狭い範囲で結婚して子孫繁栄を繰り返すことが本当に良いことなのかという疑問が残り、現実を素直に受け入れることが難しかった。



写真3. 先生の赤ちゃんと

5, 6日目には夕方にスコールが降った。久々の恵みの雨だったようだが、降水量が半端ない。道路があつという間に冠水していた。排水はどうなっているのか、下水はどうなるのか疑問を覚えた。

最後に、案内していただいた荒木先生について記しておきたい。荒木先生は、植物を見ると語らずにはいられない。「雑草という名の草はない」という言葉通り、どこから来るのかと驚くほどの知識量を有している。植物を自分の餌であるかのように、なんのためらいもなく植物に近づいていく。その姿にいつも感心させられた。植物を語る時のまなざしがすごい。そして、実直。遺跡内で植物名の表記ミスを指摘する誠実さと、いやらしさを兼ね備えている。自然と人への深い愛情を感じ取れた。長い道のりを歩きながら、カンボジアの歴史や自然等について話を聞いている時に、荒木先生の今まで経験で醸成された感情に触れ、なんとも言えない気持ちになったのを覚えている。やさしい人だなと感じた。こんな人たちがこの国の発展を支えているのだなと。

カンボジアのシェムリアップに行き、壮大な自然や遺跡と素敵な人々に出会うことができた。そんな中でカンボジアという国や人々、自然がどういう方向に発展していくのか気に

なった。将来、いまある風景が変わっていくことを想像するとなんだか切なくなる。そして、自分も含めて、幸せってなんだろうとも考えた。カンボジアはカンボジアらしさを大切にしながら、カンボジアらしく進んでいってほしいと思った。それを支える国々が多く存在し、人々がいてほしい。今回の渡航では、そんな人々が身近な人だったのでとても驚いたし、その取り組みにとっても感動した。そんな方々にこれからも頑張っていってほしいとエールを送りたい。私も微力ながら、自分にできることを考え、かかわっている子ども達とともに頑張っで学んでいきたいと思った。気持ちを新たに学びに向かえる力を与えてくれたことに心から感謝している。

ありがとうございました（写真4）。



写真4. ドローンを見上げて喜ぶ

7. 資料

2019年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要

1. 参加者

(1) インターンシップ参加学生

- 池田 絢香 (公立小松大学国際文化交流学部 国際文化交流学科 1年, グループ 1)
高畑 悠歌 (金沢大学人間社会学域国際学類 国際社会コース 2年, グループ 1)
奥村 颯太 (金沢大学理工学域環境デザイン学類 都市デザインコース 4年, グループ 1)
宮島 柚果 (公立小松大学国際文化交流学部 国際文化交流学科 1年, グループ 2)
鳥生 真衣 (公立小松大学保健医療学部 臨床工学科 1年, グループ 2)
佐藤 優 (金沢大学大学院自然科学研究科環境デザイン学専攻 1年, グループ 2)

(2) チューター

- 酒井 朋花 (金沢大学人間社会学域人文学類 フィールド文化学コース 3年)

(3) 連絡教員

- 塚脇 真二 (金沢大学環日本海域環境研究センター・教授, 8月15日～9月4日)
木村 誠 (公立小松大学国際文化交流学部・准教授, 8月17日～9月1日)

(4) 埼玉大学 (8月16日～8月23日)

- 荒木 祐二 (教育学部生活創造講座技術分野・准教授)
鈴木 宏子 (福島県立石川支援学校・教諭)

2. カンボジア側受入機関・責任者

- Hang Peou (カンボジア国立アンコール遺跡整備公団・事務局長, Director-General,
Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap,
Cambodia/金沢大学環日本海域環境研究センター・客員教授)

3. 各グループの担当業務 (図を参照)

- グループ 1: 西バライ貯水池の環境保全・観光整備事業
グループ 2: 北バライ貯水池の環境保全・観光整備事業

4. 全体日程 (2019～2020年)

- 3月17日 (日) アンコール遺跡整備公団と受け入れについての打合せ (シエムリアップ)
4月3日 (水) 第1回インターンシップ実施委員会 (金沢大学)
4月4日 (木) 第1回インターンシップ実施委員会 (公立小松大学)
4月5日 (金) インターンシップ説明会 (金沢大学人間社会学域国際学類生対象)
4月12日 (金) インターンシップ説明会 (金沢大学全学生対象)
4月12日 (金) インターンシップ参加者の募集開始 (金沢大学)

4月23日(火) インターンシップ説明会・募集開始(公立小松大学)
 5月8日(水)～10日(金) インターンシップ応募者1次選考(公立小松大学)
 5月15日(水) インターンシップ応募者2次選考(公立小松大学)
 5月20日(月) インターンシップ参加者決定(公立小松大学)
 5月24日(金) インターンシップ参加申し込み〆切(金沢大学)
 5月27日(月) 第2回インターンシップ実施委員会(金沢大学:応募書類の書類選考)
 5月28日(火) インターンシップ参加者決定・通知(金沢大学)
 5月31日(金) 選考結果を応募学生へ通知(公立小松大学)
 6月3日(月) アンコール遺跡整備公団と受け入れ日程の打合せ(シェムリアブ)
 6月13日(木) 第1回インターンシップ事前研修(公立小松大学)
 6月28日(金) 第1回インターンシップ事前研修(金沢大学)
 7月11日(木) 第2回インターンシップ事前研修(公立小松大学)
 7月12日(金) 第2回インターンシップ事前研修(金沢大学)
 7月31日(水) 第3回インターンシップ合同事前研修(公立小松大学/金沢大学)
 8月16日(金) アンコール遺跡整備公団との最終打合せ(シェムリアブ)
 8月17日(土)～9月1日(日) インターンシップ実施期間(※委細は別記)
 9月3日(火) 在カンボジア日本国大使館へ終了報告(プノンペン)
 10月30日(水) インターンシップ報告会(金沢大学)
 10月31日(木) インターンシップ報告会(公立小松大学)
 11月6日(水) インターンシップ合同事後研修(公立小松大学/金沢大学)
 11月16日(土)～17日(日): アンコール遺跡整備公団職員4名小松・金沢訪問
 12月26日(木) 小松市長を表敬訪問, インターンシップの報告(公立小松大学)
 1月XX日(x) インターンシップ報告書の出版

5. 渡航日程と現地での活動(2019年)

8月17日(土) 小松/金沢→小松空港(19:45) -JL192便→(20:55) 羽田空港
 ※埼玉大学グループ, シェムリアブ着(午前)
 8月18日(日) 羽田空港(00:40) -JL033便→(05:00) バンコク・スワンナブーム
 空港(08:00) -JL5963便→(09:10) シェムリアブ空港, 午前: ホテルにチェ
 ックイン, 午後: 滞在準備
 8月19日(月) 午前: アンコール遺跡世界遺産の見学(プラサット・クラヴァン寺院,
 スラ・スラン沐浴場跡, プラダック村, アンコール・トムなど), 在シェムリア
 ブ領事事務所表敬訪問, 午後: インターンシップ始業式, グループ業務の決定,
 グループごとに業務担当者との打合せ
 8月20日(火) 午前: 両グループ合同で西バライの業務地へ(水門や放水路, 堤防,
 西メボン寺院などの見学), 午後: 公団本部でオフィスワーク, 夜: ハン・プウ

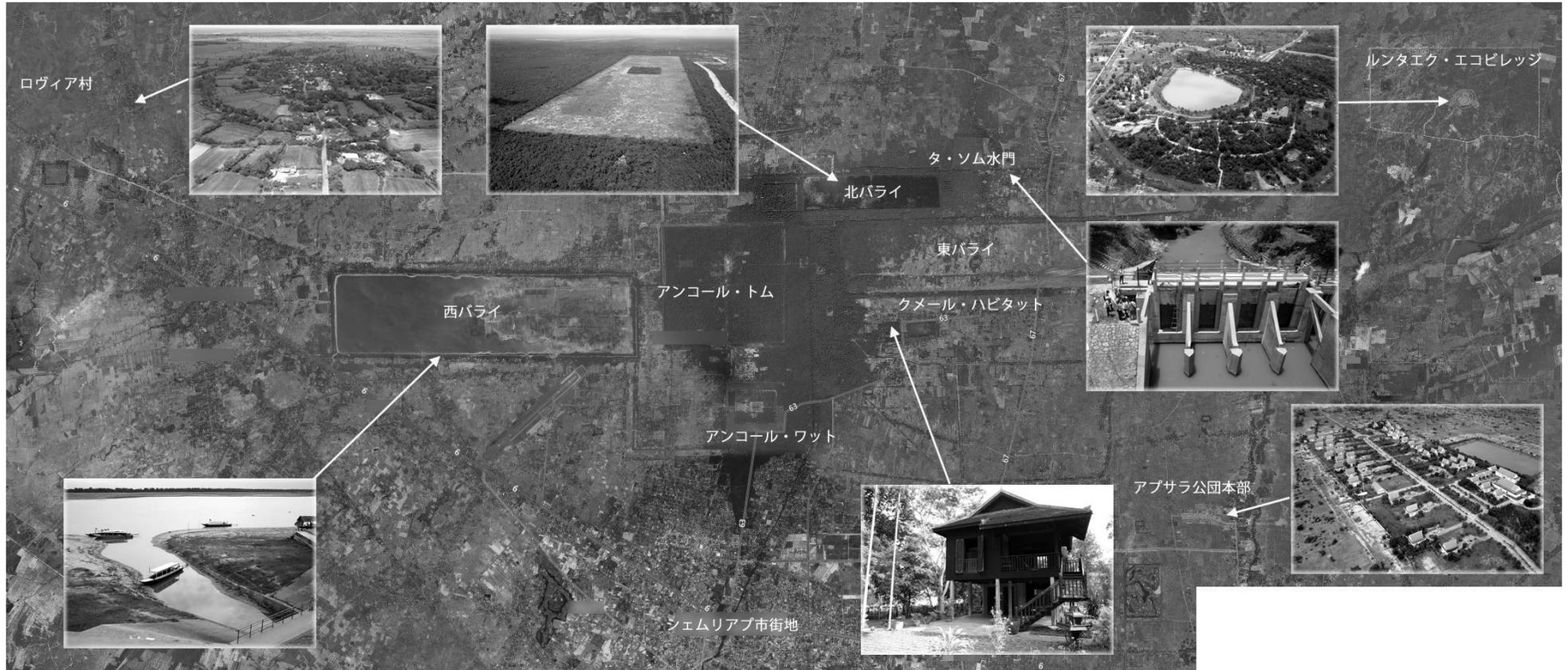
事務局長の招待による夕食会

- 8月21日（水）午前：両グループ合同で北バライの業務地へ（スラ・スラン沐浴場趾，育苗地，ニャック・ポアン寺院，タ・ソム水門などの見学），午後：公団本部でオフィスワーク
- 8月22日（木）午前：両グループ合同で古代集落ロヴィア村とプオック市場訪問，午後：クメールハビタットセンターでのクメール伝統建築についての研修
※埼玉大学グループ：帰国（夕方）
- 8月23日（金）終日：両グループ合同でルンタエク・エコビレッジ訪問（村づくり事業についての研修，記念植樹，農場や水利施設の見学など）
- 8月24日（土）午前：全員でトンレサップ湖の見学，午後：自由行動
- 8月25日（日）午前：全員でバンテアイ・スレイ寺院の見学，午後：自由行動
- 8月26日（月）午前：両グループ合同でシェムリアプ州文化地区の水路清掃作業に従事，スピエン・トモ育苗地の見学，午後：公団本部でオフィスワーク
- 8月27日（火）午前：各グループそれぞれ西バライと北バライの担当業務地へ，午後：公団本部でオフィスワーク
- 8月28日（水）午前：両グループ合同でアンコール・トム寺院周辺の水利ネットワークとバイヨン寺院の見学，午後：タ・プローム寺院の見学
- 8月29日（木）午前：両グループ合同でアンコール・ワット寺院の見学，午後：自由行動
- 8月30日（金）午前：両グループともに担当職員との業務内容のフィードバック，午後：水管理部門副部長と担当職員による口頭試問，夜：公団本部で関係者らとのお別れバーベキューパーティ
- 8月31日（土）終日：自由行動，夕方：ホテルをチェックアウト，シェムリアプ（19:25）
－JL5964 便→（20:35）バンコク・スワンナブーム空港（21:55）－JL034 便（機内泊）→羽田空港（9月1日 6:05 着）
- 9月1日（日）羽田空港（7:45）－JL183 便→（8:45）小松空港→小松／金沢

※JL：日本航空

8. 資料

インターンシップでの業務地とおもな訪問地



インターンシップでの各グループの業務地（グループ1：北バライ，グループ2：西バライ）とアンコール世界遺産公園内外の学生たちのおもな訪問地（ルンタエク・エコビレッジ，ロヴィア村，クメール・ハビタットセンター，タ・ソム水門），およびアプサラ公団本部の位置（Bing Maps に加筆）。

2019年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

2019年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

青木あい（公立小松大学総務課総務係 職員）
上田長生（金沢大学人間社会学域国際学類 准教授）
木村 誠（公立小松大学国際文化交流学部 准教授）
古泉達矢（金沢大学人間社会学域国際学類 准教授）
辻谷友紀（金沢大学学生部学務課教務係 係長）
塚脇真二（金沢大学環日本海域環境研究センター 教授/
公立小松大学国際交流センター 特任教授）

発行所	公立小松大学国際交流センター 〒923-0921 石川県小松市土居原町 10-10 TEL (0761) 23-6600 FAX (0761) 48-3248 金沢大学環日本海域環境研究センター 〒920-1192 石川県金沢市角間町 TEL (076) 264-5455 FAX (076) 264-5468
-----	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

印刷	2020年1月28日
発行	2020年1月31日
印刷所	前田印刷株式会社 〒924-0004 石川県白山市旭丘 2-16 TEL (076) 274-2225 FAX (076) 274-5223

